

茨城県教育財団文化財調査報告第231集

# 島名関ノ台南B遺跡 面野井北ノ前遺跡

常磐新線建設工事内地内  
埋蔵文化財調査報告書2

平成16年3月

日本鉄道建設公団関東支社  
財団法人 茨城県教育財団

しま　な　せき　の　だい　みなみ  
島名関ノ台南B遺跡  
おも　の　い　きた　の　まえ  
面野井北ノ前遺跡

常磐新線建設工事地内  
埋藏文化財調査報告書2

平成16年3月

日本鉄道建設公団関東支社  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

日本鉄道建設公団関東支社は、東京都の秋葉原を起点として、埼玉県、千葉県を通り茨城県守谷市、伊奈町、谷和原村を経てつくば市の筑波研究学園都市に至る延長約58kmのつくばエクスプレスの建設・整備を進めております。これは昭和60年7月の21世紀を展望した東京圏における高速鉄道を中心とする交通網の整備に関する運輸省政策審議会答申及び「大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法」に基づいて計画されたもので、県南・県西地域の交通を充実させ、沿線地域を活性化する効果が期待されています。

以上のつくばエクスプレス建設予定地内には守谷町、谷和原村にそれぞれ原遺跡、沼崎遺跡などの遺跡が所在しております、すでに当財団によって調査・報告がなされております。

財団法人茨城県教育財団は、日本鉄道建設公団関東支社より埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成14年4月から平成14年5月まで島名関ノ台南B遺跡、平成14年6月に面野井北ノ前遺跡の発掘調査をそれぞれ実施いたしました。

本書は、島名関ノ台南B遺跡と面野井北ノ前遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本鉄道建設公団関東支社から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

## 例　　言

1 本書は、日本鉄道建設公団関東支社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字島名字閑ノ台309番地ほかに所在する島名閑ノ台南B遺跡、同市大字面野井字北ノ前1200番地の1ほかに所在する面野井北ノ前遺跡の発掘調査報告書である。

2 2遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　島名閑ノ台南B遺跡　平成14年4月1日～5月31日

面野井北ノ前遺跡　平成14年6月3日～6月30日

整理　島名閑ノ台南B遺跡・面野井北ノ前遺跡　平成15年4月1日～平成15年6月30日

3 2遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久のもと、島名閑ノ台南B遺跡を調査第一課第1班長鰐渕和彦、首席調査員荒井保雄、主任調査員成島一也が担当し、面野井北ノ前遺跡を調査第一課第1班長鰐渕和彦、副主任調査員駒澤悦郎、調査員鹿島直樹が担当した。

4 2遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、調査員鹿島直樹が担当した。

## 凡 例

1 2 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、島名関ノ台南B遺跡は、X = +7,436m, Y = +20,920mの交点、面野井北ノ前遺跡はX = +8,312m, Y = +21,316mの交点をそれぞれ基準点（A 1 a1）とした。なおこの原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C……、西から東へ1, 2, 3……とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c……j、西から東へ1, 2, 3……0とし、名称は大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」、「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の覧には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 古墳-T M 土坑-S K 構跡-S D ピット-P

遺物 拓本記録土器-T P 石器・石製品-Q 金属器・金属製品-古銭-M

4 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

 炉・火床部・焼土・赤彩  電材・埴輪  油煙・煤・鉄滓

● 土器 □ 石器・石製品 △ 金属器・金属製品 - - - - - 硬化面

5 土層觀察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社)を使用した。

6 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

7 遺構・遺物実測図及び遺物観察表等の作成方法と掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は島名関ノ台南B遺跡は200分の1、面野井北ノ前遺跡は300分の1として、遺構は原則的に60分の1に縮尺して掲載したが、種類や大きさにより異なる場合もある。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にしたが、種類や大きさにより異なる場合もある。

(3) 「主軸」は、炉・竈を持つ堅穴住跡については炉・竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E, N-10°-W）。

(4) 遺物の計測値の単位はcm, gである。また、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

(5) 遺物観察表の備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

(6) 遺物番号については、挿図、観察表、写真図版に付した番号を同一とした。

# 抄 錄

ふりがな	しまなせきのだいみなみびーいせき・おものいきたのまえいせき							
書名	島名関ノ台南B遺跡・面野井北ノ前遺跡							
副書名	常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次	2							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第231集							
編著者名	鹿島直樹							
編集機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行年月日	2004(平成16)年3月31日							
ふりがな所取遺跡	ふりがな所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
島名関ノ台南B遺跡	茨城県つくば市大字島名字関ノ台309番地ほか	08220   561	36度 04分 05秒 36度 04分 16秒	140度 03分 55秒 (140度) 03分 16秒	18 22m	20020401 20020531	485m <sup>2</sup>	常磐新線建設事業に伴う事前調査
面野井北ノ前遺跡	茨城県つくば市大字面野井字北ノ前1200番地の1ほか	08220   562	36度 04分 33秒 36度 04分 44秒	140度 04分 12秒 (40度) 04分 00秒	18 23m	20020603 20020630	923m <sup>2</sup>	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
島名関ノ台南B遺跡	集落跡	古 墳	竪穴住居跡 2軒	土師器(壺・椀・甕),須恵器(壺)	古墳時代中期から平安時代の住居跡が中心の複合遺跡であり、多量の鉄滓や鉄鉢形土器を転用した鍛冶炉跡を持つ工房跡も確認された。			
		奈良・平安	竪穴住居跡 5軒	土師器(壺・高台付壺・甕),須恵器(壺・盤・高盤・鉢・甕),三彩陶器(皿・小壺),鐵製品(鏡・刀子・釘),鐵滓	ほかに古墳1基が確認されている。			
		近	世 土坑	2基				
	墓域	古 墳	古墳	1基				
	その他	時期不明	土坑 溝跡	32基 4条				
面野井北ノ前遺跡	墓域	古 墳	古墳	1基	土師器(壺),須恵器(甕)	古墳時代から中・近世にかけての墓域が中心の複合遺跡である。表土中より荒屋形彫器が検出されている。		
		中 世	方形窓穴状遺構	1基	石製品(礎石)			
		近 世	墓塚	1基	古鏡,人骨			
	その他	時期不明	土坑 溝跡	22基 6条				

# 目 次

序  
例 言  
凡 例  
抄 錄

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 島名閣ノ台南B遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 古墳時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 古墳	13
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	15
(1) 竪穴住居跡	15
(2) 鍛冶工房跡	24
3 近世の遺構と遺物	28
土坑	28
4 その他の遺構と遺物	30
(1) 土坑	30
(2) 溝跡	35
(3) 遺構外出土遺物	38
第4節 まとめ	41
第4章 面野井北ノ前遺跡	43
第1節 遺跡の概要	43
第2節 基本層序	43
第3節 遺構と遺物	46
1 古墳時代の遺構と遺物	46
古墳	46
2 中・近世の遺構と遺物	48
(1) 方形竪穴遺構	48
(2) 墓壙	49
3 その他の遺構と遺物	50
(1) 土坑	50
(2) 溝跡	57
(3) 遺構外出土遺物	64
第4節 まとめ	65

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成8年10月17日、日本鉄道建設公団関東支社長（平成14年3月まで首都圏新都市鉄道株式会社社長）は、茨城県教育委員会教育長に対して、常磐新線建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、関ノ台地区を平成12年12月22日に現地踏査、平成13年12月14日に試掘調査、さらに面野井地区を平成14年3月5日に現地踏査、同年4月18日に試掘調査を実施し、それぞれの遺跡の所在を確認した。茨城県教育委員会教育長は、平成14年2月8日、日本鉄道建設公団関東支社長あてに事業地内に島名関ノ台南B遺跡が所在する旨を回答し、さらに面野井北ノ前遺跡が所在する旨についても同年4月18日に回答した。

日本鉄道建設公団関東支社長は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成14年2月28日に島名関ノ台南B遺跡、同年4月23日に面野井北ノ前遺跡を文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、日本鉄道建設公団関東支社長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう、島名関ノ台南B遺跡を平成14年3月1日、面野井北ノ前遺跡を同年4月23日にそれぞれ通知した。

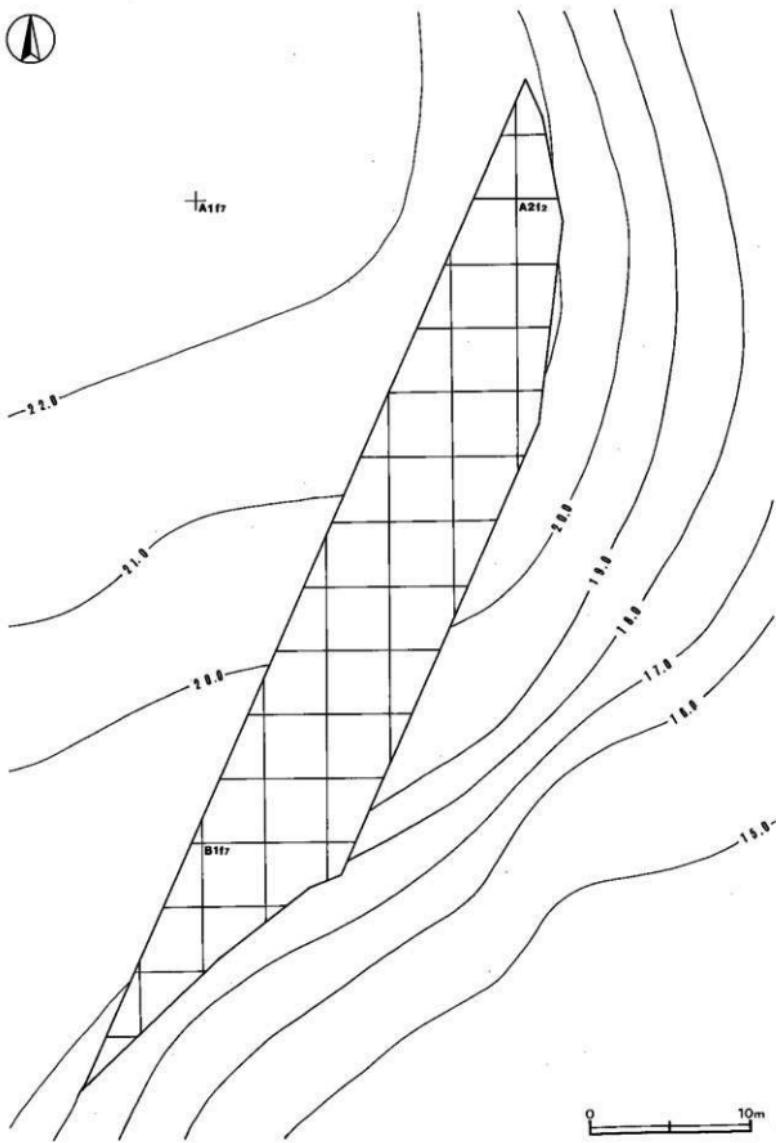
日本鉄道建設公団関東支社長は、茨城県教育委員会教育長に対して、常磐新線建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について、島名関ノ台南B遺跡は平成14年3月1日、面野井北ノ前遺跡は同年4月25日にそれぞれ協議した。茨城県教育委員会教育長は、日本鉄道建設公団関東支社長あてに、平成14年3月1日に島名関ノ台南B遺跡、同年4月30日に面野井北ノ前遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、日本鉄道建設公団関東支社長から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成14年4月1日から同年5月31日まで島名関ノ台南B遺跡、平成14年6月3日から同年6月30日まで面野井北ノ前遺跡の発掘調査をそれぞれ実施することになった。

## 第2節 調査経過

2遺跡の発掘調査は、島名関ノ台南B遺跡が平成14年4月1日から平成14年5月31日までの2ヶ月間、面野井北ノ前遺跡を平成14年6月3日から平成14年6月30日までの1ヶ月間実施した。

作業項目	4月	5月	6月
調査準備 表土剥離確認	[ ]		[ ]
遺構調査		[ ]	[ ]
遺物注記・ 洗浄・整理		[ ]	[ ]
補埋戻し備			[ ]



第1図 島名関ノ台南B遺跡調査区設定図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

島名闕ノ台南B遺跡は、茨城県つくば市大字島名字闕ノ台309番地ほかに所在し、面野井北ノ前遺跡は、同市大字面野井字北ノ前1200番地の1ほかに所在する。これらの遺跡は東谷田川を挟んでほぼ向かい合っており、両遺跡間の距離は0.85kmほどである。

つくば市は、茨城県の南西部に位置し、両遺跡は同市の南西部に位置した旧筑波郡谷田町に所在する。

つくば市の地形は、北に八溝山地の4つの山塊のひとつである筑波山塊の主峰筑波山がそびえ立ち、南には常総台地が広がり、その一部に桜川と小貝川に区切られた筑波・稻敷台地が存在する。この台地は成田層と呼ばれる貝化石の多い砂礫層を主体とし、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層・砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層、褐色の関東ローム層が連続して堆積し、最上部は麻植土層となっている<sup>1)</sup>。

旧谷田町域の島名地区は、東谷田川と西谷田川に挟まれた台地上に位置する。東谷田川は、島名地区において蓮沼川などと合流して、多くの谷津を形成している。両遺跡は、蓮沼川との合流点より東谷田川を北に約2kmほどさかのぼった地域に位置し、東谷田川を挟んで対峙している。島名闕ノ台南B遺跡は右岸の標高約20mの台地の緩斜面に位置し、面野井北ノ前遺跡は左岸の標高約20mの舌状台地縁辺部に位置している。台地上は畑地として耕作され、河川の沖積低地は水田として利用されている。また、両遺跡の調査前の現況は、畠地もしくは山林である。

### 第2節 歴史的環境

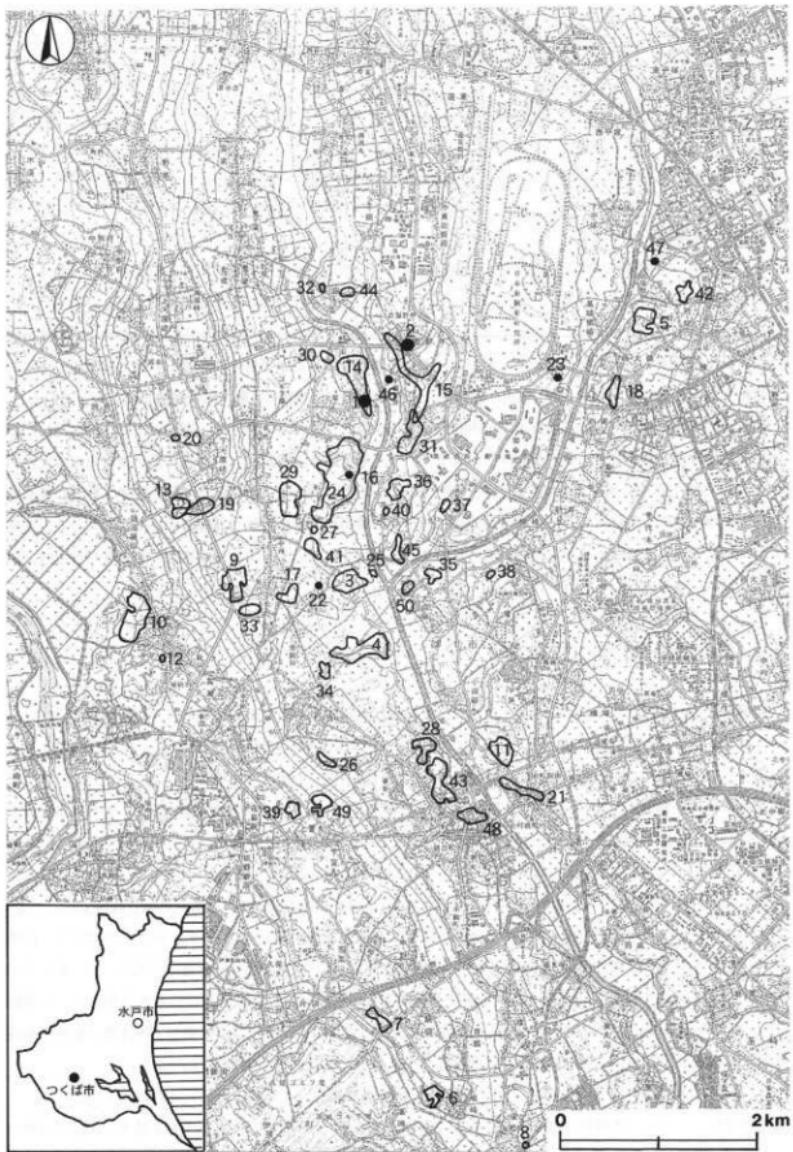
両遺跡周辺の地域は、地形的にも変化に富み、小貝川、東谷田川、西谷田川、蓮沼川などの流域は、古くから人々が生活を営む場として適していたようである。このことは、周辺遺跡の分布状況からも窺い知ることができる。ここでは両遺跡に関連する主な遺跡について、時代を追って述べる。

旧石器時代の遺跡としては、東谷田川右岸の島名前野東遺跡（3）や島名境松遺跡（4）、東谷田川支流の蓮沼川左岸の刈谷神田遺跡（5）、西谷田川右岸の根崎遺跡（6）や西栗山遺跡（7）が存在する。これらの遺跡からはナイフ型石器や石刃などが出土しているが、遺構に伴うものではない。

縄文時代には、小貝川や東谷田川、西谷田川などの河川に面した台地縁辺部に集落が形成されるようになる。代表的な遺跡としては、東谷田川右岸の台地上に立地している境松貝塚<sup>2)</sup>（8）をあげることができる。前期から中期にかけての遺構が確認され、地点貝塚が確認されたことが注目される。両遺跡の周辺では、東谷田川右岸台地上に位置する島名前野東遺跡<sup>3)</sup>や島名境松遺跡<sup>4)</sup>、西谷田川左岸台地上に位置する島名ツバタ遺跡（9）に中期の遺構が存在することが当財団の調査により明らかになった。この時期も、内陸部に集落を形成することはまれで、河川や谷津に面した台地縁辺部にほとんどが形成されている。

弥生時代の遺跡は当地域ではなく、谷田部地区では境松貝塚などが確認されているだけである。

古墳時代になると、遺跡数は急激に増加する。昭和34年に行われた谷田部地区での分布調査では、古墳群11か所、古墳約300基が確認され<sup>5)</sup>、東谷田川流域だけでも、古墳群15か所、古墳102基が知られている。両遺跡周辺にも、島名闕ノ台古墳群（14）、面野井古墳群（15）、島名熊の山古墳群（16）、島名権内古墳群（17）、西



第2図 島名関ノ台南B遺跡・面野井北ノ前遺跡周辺遺跡分布図

表1 島名関ノ台南B遺跡・面野井北ノ前遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	時 代					
		旧 石	繩 器	弥 文	古 生	奈 墳	中 平		旧 石	繩 器	弥 文	古 生	奈 墳	中 平
		石 器	文	生	墳	平	世		器	文	生	墳	平	世
1	島名関ノ台南B遺跡			○	○	○		26	谷田部漆遺跡	○		○		
2	面野井北ノ前遺跡		○	○	○			27	島名葉師遺跡			○		
3	島名前野東遺跡	○	○	○				28	谷田部福田遺跡	○		○		
4	島名境松遺跡	○	○					29	島名本田遺跡			○		○○
5	莉間神田遺跡	○	○	○	○	○	○	30	島名關の台遺跡			○		
6	根崎遺跡	○		○	○			31	面野井南遺跡			○	○	○
7	西栗山遺跡	○	○		○			32	高田和田台遺跡			○		
8	境松貝塚	○	○	○				33	島名櫻内遺跡			○		
9	島名ツバタ遺跡	○	○	○		○	○	34	島名タカドロ遺跡	○		○		
10	真瀬山田遺跡	○	○					35	平北田遺跡			○		
11	谷田部台成井遺跡	○						36	水堀下道遺跡			○		
12	真瀬新田谷津遺跡	○						37	水堀遺跡			○		
13	下河原崎高山遺跡	○						38	柳橋遺跡			○		○
14	島名関ノ台古墳群			○				39	真瀬三度山遺跡	○		○		
15	面野井古墳群			○				40	水堀屋敷添遺跡	○		○		○
16	島名熊の山古墳群			○				41	島名八幡前遺跡			○	○	○
17	島名櫻内古墳群			○				42	莉間六十目遺跡			○	○	○
18	西大樋中内台古墳群			○				43	谷田部福田前遺跡	○		○	○	
19	下河原崎高山古墳群			○				44	高田遺跡			○		○
20	下河原崎古墳群			○				45	水堀道後前遺跡			○		
21	谷田部町古墳群			○				46	面野井城跡					○
22	島名前野古墳			○				47	莉間城跡				○	○
23	西大樋塚山古墳			○				48	谷田部城跡				○	○
24	島名熊の山遺跡			○	○	○	○	49	上荳丸古屋敷遺跡			○	○	○
25	島名前野遺跡	○	○	○				50	平後遺跡			○		○

おおほりしならうもの  
大橋中内台古墳群（18）などの古墳群や、島名前野古墳（22）、西大塚山古墳（23）などの古墳が確認されている。とくに面野井2号墳からは、旧谷田部町域唯一の小形方製鏡（四獸鏡）が出土して、注目されている。

両遺跡周辺の集落跡は、当財団の調査によって、古墳時代を通して生活が営まれた島名熊の山遺跡<sup>24</sup>（24）、島名前野東遺跡<sup>25</sup>（25）、島名前野東遺跡などが確認されている。また、谷田部遺跡<sup>26</sup>（26）では中期、島名境松遺跡や島名药师遺跡（27）では後期の集落跡が確認されている。今後、谷田部福田遺跡（28）、島名本田遺跡（29）、島名闇ノ台遺跡（30）、面野井南遺跡（31）などの遺跡の性格把握が待たれるところである。

奈良・平安時代には、島名地区は河内郡に編入される。河内郡衙は、当遺跡から北東へ4.5kmの距離に位置する桜地区的金田西遺跡・金田西坪A遺跡・金田西坪B遺跡付近に所在する<sup>29</sup>。両遺跡の所在する島名地区は、『和名類聚抄』の「嶋名郷」に比定されている<sup>10</sup>。郷内に所在する島名熊の山遺跡は、古墳時代前期に集落が形成されはじめ、奈良・平安時代を含めて堅穴住居跡1300軒以上という島名地区最大の拠点的な集落であったと考えられる。ほかにも島名八幡前遺跡（41）や刈谷六十日遺跡（42）などが確認されている。

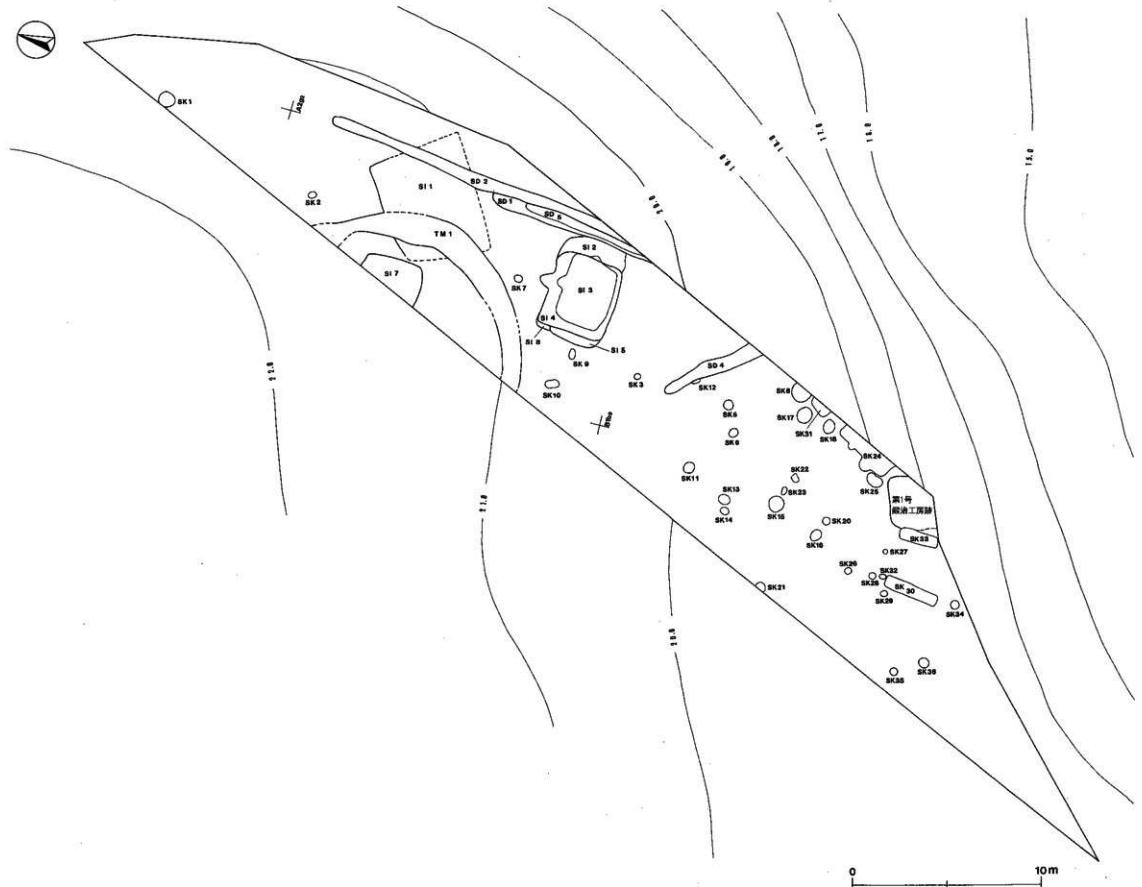
中世になると、島名地区は田中荘と呼ばれ、鎌倉幕府の成立後、八田知家の入部によって多毛義幹が没落し、田中荘は小田氏の支配下に入る。室町時代の両遺跡の周辺は、小田氏配下の平井手氏が面野井城（16）を構えて島名・面野井に住していたといわれている<sup>11</sup>。中世以降、確認される遺跡は城館跡がほとんどであり、島名前野東遺跡では方形に巡る堀を伴う居館跡が確認されている。

近世の谷田部は大部分が谷田部藩領となり、島名地区は旗本領となっている。

※ 文中の（ ）内の番号は、表1、第1図の該当番号と同じである。

## 註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 久野俊度「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内文化財調査報告書 捨松遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第41集 1987年3月
- 3) 寺門千勝「島名・福田坪・一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 島名前野東遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第191集 2002年3月
- 4) 田原康司「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 島名境松遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第191集 2002年3月
- 5) 谷田部町教育委員会 谷田部町文化財保存会「谷田部町文化財報告Ⅰ」『古墳總覽』 1960年
- 6) 稲田義弘「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ 熊の山遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第190集 2002年3月
- 7) 藤田哲也・川上直登・稻田義弘「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VI 島名前野東遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第175集 2001年3月
- 8) 梅澤貴司「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ 谷田部捺遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第191集 2002年3月
- 9) 白川正子「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ 金田西遺跡・金田西坪B遺跡・九重東岡廃寺」『茨城県教育財團文化財調査報告』第209集 2003年3月
- 10) 池邊 譲「和名類聚抄御里跡名考證」吉川弘文館 1981年2月
- 11) 谷田部町教育委員会 谷田部の歴史編さん委員会『谷田部の歴史』 1976年9月



第3図 島名門ノ台南B遺跡遺構全体図

## 第3章 島名関ノ台南B遺跡

### 第1節 遺跡の概要

島名関ノ台南B遺跡は、奈良・平安時代を中心とした、古墳時代から近世にかけての複合遺跡であることが確認できた。

今回の調査によって、古墳時代の竪穴住居跡2軒、古墳1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒、鍛冶工房跡1基、近世の土坑2基、時期不明の土坑32基、溝4条などが検出された。遺物は、土師器、須恵器を中心に遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に6箱出土している。

古墳時代では、中期の竪穴住居跡が2軒検出され、後期にはそれらの上に古墳が築かれている。

また、奈良・平安時代には、竪穴住居跡5軒が隣接して構築され、鍛冶工房跡からは、多量の鉄滓や鐵造剥片、粒状滓が出土している。

このほか、近世の土坑と考えられる長方形の土坑が検出されている。

### 第2節 基本層序

基本層序観察用のテストピットは、調査区西端のA 1a9区に掘削した。地表面の標高は19.8mで、地表面から深度1.7mまで掘削し、基本土層図は第4図に示した。

テストピットの上層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから10層に細分される。これらは、大きく表土・関東ローム層・常総粘土層に分類され、第1層が表土(耕作土)、第2～8層が関東ローム層、そして第9・10層が常総粘土層に相当し、次に各層の特徴を述べる。

第1層は、暗褐色を呈する腐植土層で、ロームブロックを少量含む。粘性・しまりはともに弱く、層厚は22～29cmである。

第2層は、褐色を呈するローム層で、粘性・しまりはともに普通である。層厚は6～12cmであり、ソフトロームに相当すると考えられる。なお、第1黒色帯については確認することができなかった。

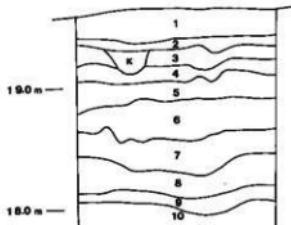
第3層は、にぶい褐色を呈するローム層で、粘性は普通であるが、しまりは強い。層厚は8～20cmであり、ハーフロームに相当すると考えられる。

第4層は、にぶい褐色を呈するローム層で、始良Tn火山灰(AT)を含む。粘性は普通であるが、しまりは強く、層厚は6～14cmである。

第5層は、にぶい褐色を呈するローム層で、粘性は普通であるが、しまりは強い。層厚は14～24cmであり、第2黒色帯に相当すると考えられる。

第6層は、にぶい褐色を呈するローム層で、粘性・しまりはともに強い。層厚は16～32cmであり、第2黒色帯に相当すると考えられる。

第7層は、にぶい橙色を呈するローム層で、黑色粒子を中量



第4図 基本土層図

含む。粘性・しまりともに普通であり、層厚は26~46cmである。

第8層は、にぶい黄褐色を呈するローム層で、白色粒子をわずかに含む。粘性・しまりともに強く、層厚は15~30cmである。

第9層は、にぶい黄褐色を呈する粘土層で、粘土ブロック・赤色粒子をわずかに含む。粘性は普通で、しまりは強く、層厚は8~14cmである。

第10層は、にぶい黄褐色を呈する粘土層で、粘土ブロックを少量含む。粘性・しまりは普通で、層厚は14cm以上あり、下層が未掘のため本来の厚さは不明である。

住居跡・土坑等の遺構は、第2層上面で確認した。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、古墳時代の堅穴住居跡2軒と古墳1基を確認した。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

##### (1) 堅穴住居跡

###### 第1号住居跡（第5図）

位置 調査区北東部のA 211区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 北西部を第1号墳、北東部を第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.84m、短軸4.98mの長方形と推定され、主軸方向はN-25°-Eである。壁高は9~14cmで、各壁ともほぼ直立しているが、南東部は斜面部で削平されている。

床 ほぼ平坦で、特に踏み固められたところはみられない。また、壁溝は検出されていない。

炉 床中央部南西寄りに付設されている。長径68cm、短径54cmの楕円形を呈し、床面を若干掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。

###### 炉土層解説

- 1 喧褐色 焼上ブロック多量、ローム粒子微量

ピット 3か所。P 1は深さ40cmほどで北壁中央よりやや東に位置している。覆土は2層からなりローム粒子を主体とする自然堆積である。P 2は深さ35cmで、中央部よりやや北側に位置している。P 3は深さ36cmで、西壁中央部よりやや東に位置している。覆土は3層からなりロームブロックが多量に混入した人為堆積である。

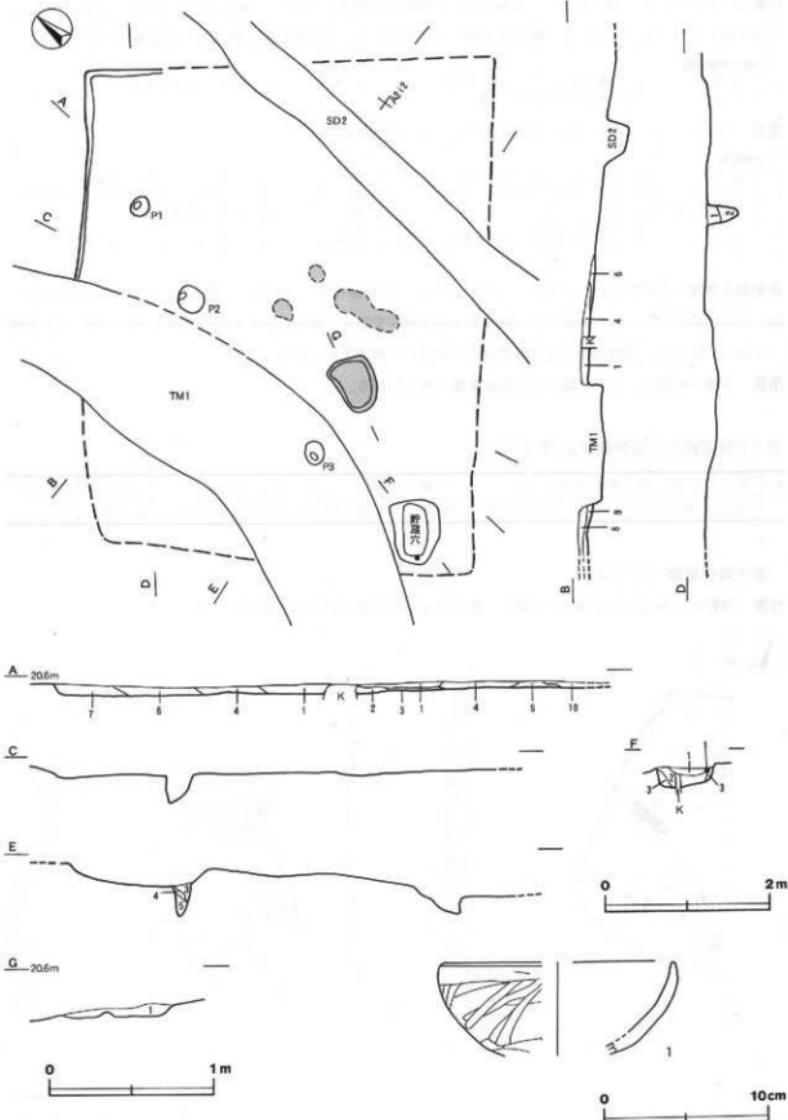
いずれのピットも位置から主柱穴とは考えられず、性格は不明である。

###### ピット土層解説

- 1 喧 色 ローム粒子少數  
2 喧 色 ロームブロック微量  
3 喧 暗色 ローム粒子少數、縫まり弱い

###### 4 暗 色 ロームブロック多量

- 5 喧 暗色 ローム粒子少數



第5図 第1号住居跡・出土遺物実測図

**貯蔵穴** 南西コーナー部に位置し、長軸78cm、短軸56cmの隅丸長方形で、深さは25cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は3層からなり焼土や、炭化物の混入状況から人為堆積である。

#### 貯蔵穴土層解説

- |   |     |                   |   |     |              |
|---|-----|-------------------|---|-----|--------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |   |     |              |

**覆土** 10層からなり、レンズ状の堆積状況を示した、自然堆積である。

#### 土層解説

- |   |      |                     |    |     |                         |
|---|------|---------------------|----|-----|-------------------------|
| 1 | 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6  | 褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量       |
| 2 | 褐色   | ローム粒子中量、炭化粒子微量      | 7  | 褐色  | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量              | 8  | 褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子微量          |
| 4 | 褐色   | ローム粒子・焼土粒子微量        | 9  | 褐色  | ローム粒子中量                 |
| 5 | 褐色   | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 10 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量     |

**遺物出土状況** 土師器片34点（坏類7、碗1、甕26）、須恵器片6点（坏類5、甕1）、モモと思われる植物の種子2点が出土している。出土した土器片の大半は細片であり、図化できたものはほとんどないが、1は貯蔵穴上層より出土し、植物の種子は北西壁付近の床面から検出されている。

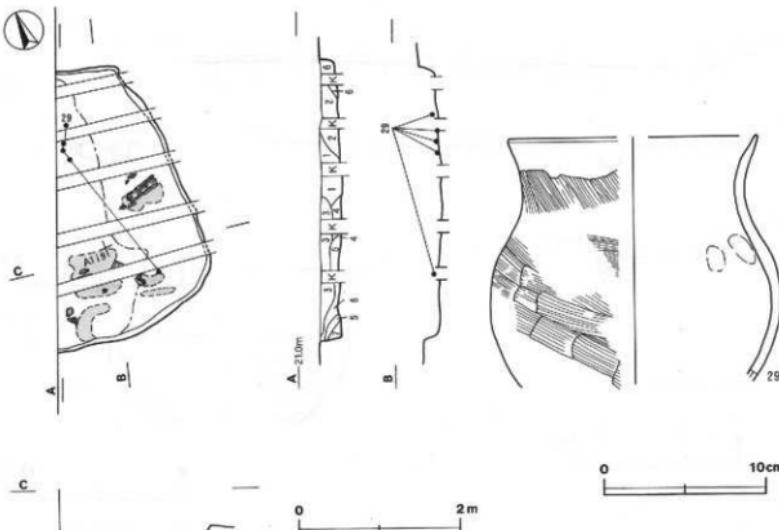
**所見** 本跡の時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	椀	[14.2]	(5.7)	—	石英・雲母	明赤褐色	普通	体部外面上部ヘラ削ぎ、下部ヘラ削り	覆土下層	20%

第7号住居跡(第6図)

**位置** 調査区北西部のA 1h0区に位置し、標高21.6mの台地平坦部に立地している。



第6図 第7号住居跡・出土遺物実測図

**重複関係** 本跡の上に第1号古墳の墳丘が構築されたものと考えられる。

**規模と形状** 本跡の北西側は調査区外へ延びているが、長軸3.40m、短軸は1.60mほどが確認され、方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN-18°-Eであり、壁高は8~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がっていいる。

**床** ほぼ平坦で、踏み固められたところは多少見られる。耕作による搅乱が著しいため残存する部分は非常に少なく、床面に広がっていたと思われる焼土や炭化材は若干残る程度である。また、壁溝は検出されていない。

**炉** 調査した範囲では確認されない。

**ピット** 調査した範囲では確認されない。

**覆土** 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

**土層解説**

1	暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子・炭化物、燒土粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
4	暗赤褐色	燒土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量

5	赤褐色	燒土粒子中量、炭化粒子微量
6	暗暗褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
7	にじく黒褐色	粘土ブロック多量

**遺物出土状況** 土師器片76点(坏3、高坏1、甕72)、須恵器片2点(坏1、蓋1)が出土しているが、搅乱が著しいため、すべてのものが本跡に伴うものとは限らない。遺物は中層から下層に多く分布し、29は床面直上に散乱した状態で検出された。

**所見** 本跡は床面から検出された焼土や炭化材から消失家屋と考えられる。また時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	額高	底径	胎土	色調	純成	手法の特徴	出土位置	備考
29	土師器	甕	[18.4]	(15.3)	—	石英・長石・酸母	橙	普通	口縁部横ナメ、底部外面ハケに調整、内底部底面有り	覆土下層	10%

表2 古墳時代住居跡一覧表

序号	位 置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規 模	壁 高	床 面	壁溝	内 部 施 設	覆 土	主な出土遺物	時 期	備 考
1	A2H	N-25°-E (接方形)	[5.84]×[4.96]	9~14	平坦	—	—	3 柱穴 凹凸 火口 火坑	I 1 炉1 自然	土師器、須恵器、その他の 小物類、瓦器類、骨器類等	5世紀後葉	TNU-SII
7	A1Hb	N-18°-E (方 形)	3.40 × (1.60)	8~20	平坦	—	—	—	—	自然 土師器、須恵器	5世紀後葉	TNU

## (2) 古墳

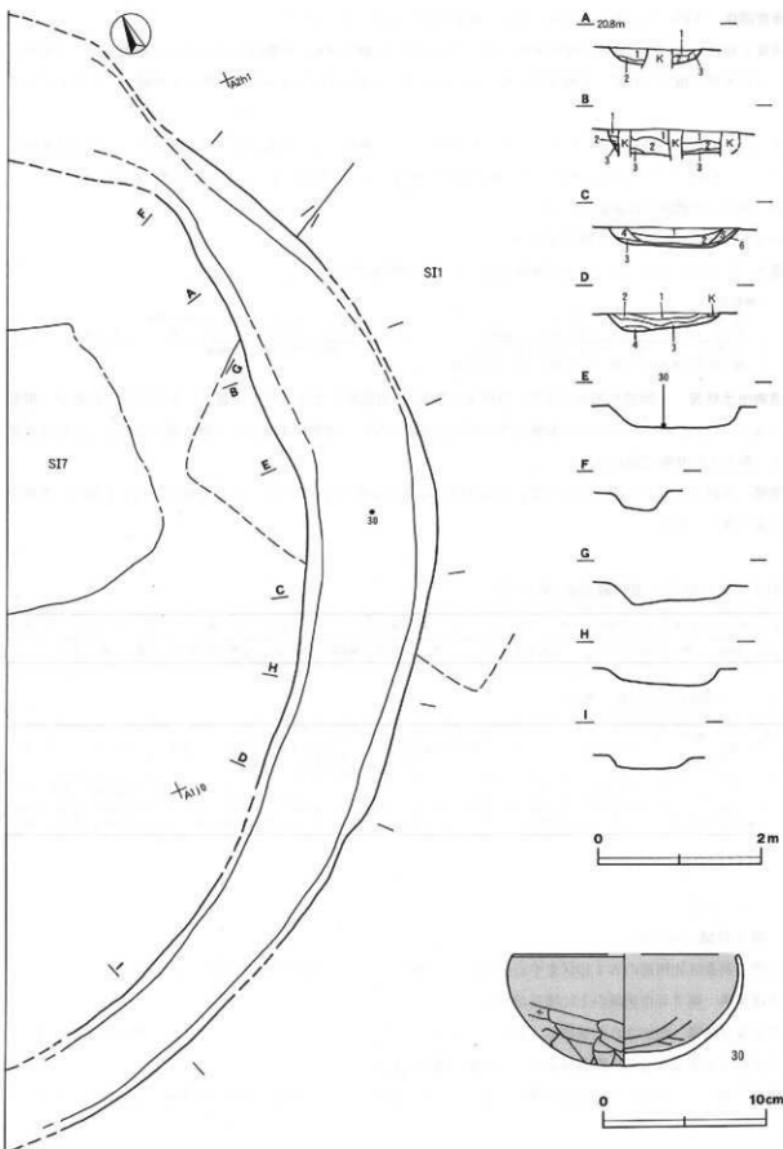
### 第1号墳(第7図)

**位置** 調査区北西部のA1i0区を中心に位置し、標高21.3mの台地平坦部に立地している。

**重複関係** 第7号住居跡の上に墳丘が構築されている。

**墳形及び規模** 検出された規模は、南北13.7mほどで墳丘のほとんどが削平されている。西側は調査区外のため詳細は不明であるが、直径16mほどの円墳と推察される。

**墳丘** 削平により墳丘の大部分は存在しないが、内径16mほどの円墳であり、埋葬施設は未確認である。



第7図 第1号古墳・出土遺物実測図

周溝 上幅0.7~1.6m, 深さ0.15~0.26mで、底面はほぼ平坦であるが、部分的に内側に傾斜する所も見られる。また、壁は外傾して立ち上がる。覆土は6層からなり、ローム粒子を主体とするレンズ状の堆積を示す自然堆積である。

#### 周溝土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量	4 褐色	ロームブロック小量
2 塗褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ローム粒子少量
3 塗褐色	ローム粒子少量・焼土粒子微量	6 明褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土器片69点(坏33, 売36), 須恵器(坏1)が出土している。これらは上層から下層まで散乱した状態で検出され、そのほとんどは細片である。30は周溝中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第1号古墳出土遺物観察表(第7図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	壺成	手法の特徴	出土位置	備考
30	土器器	壺	[14.0]	7.0	—	石英・霞母	赤褐色	普通	体部外側下位ヘラ削り, 内面ヘラナード	覆土下層	60% PL9 内外面赤色

## 2 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、堅穴住居跡5軒と鍛冶工房跡1基を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記述する。

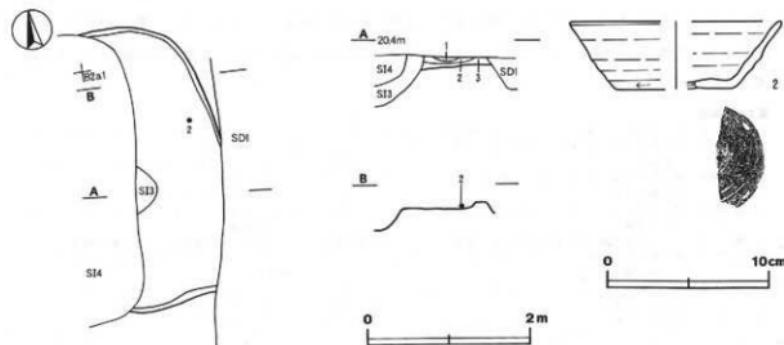
### (1) 堅穴住居跡

#### 第2号住居跡(第8図)

位置 調査区北東部のB-2a1区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 西側の大部分を第3・4号住居跡、南東部を第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.54m、短軸は1.06mほど確認され方形または長方形と考えられる。主軸方向は真北を向き、壁高は8cmで、外傾して立ち上がっている。



第8図 第2号住居・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、踏み固められたところは見られない。また壁溝は検出されていない。

竈 調査した範囲では確認されていない。

ピット 調査した範囲では確認されていない。

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積する自然堆積である。

#### 土壤解説

1 灰褐色 ローム粒子微量

2 塗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片83点（坏4、壺79）、須恵器片12点（坏9、蓋2、甕1）が出土している。多くの遺物は覆土下層から出土しているが、細片が多いため同定できなかった。2は、北東部の床面よりやや高い位置より出土し、本跡埋没直後に流れ込んだものと考えられる。

所見 本跡は時期判定が可能な遺物がわずかため断定できないが、第3・4号住居跡に掘り込まれていることから9世紀以前につくられたものと考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第8図)

番号	種別	器種	口径	底高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	須恵器	壺	[13.0]	4.2	[7.2]	石英・長石・雲母	褐灰	普通	口縁部横ナギ、全体外面下端回転ヘラ削り	覆土中層	30%

#### 第3号住居跡(第9図)

位置 調査区北東部のB1a0区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 第2号住居跡の西部を掘り込み、さらに本跡の床上には拡張と考えられる第4号住居跡が重複している。

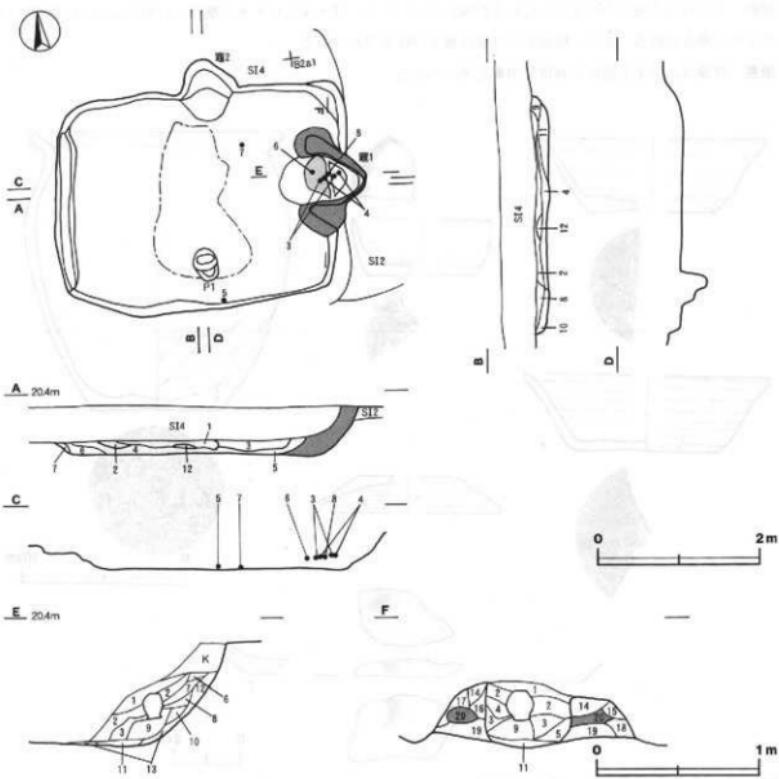
規模と形状 長軸3.57m、短軸2.76mの長方形で、主軸方向はN-93°-Eである。壁高は約48cmで、各壁とも外傾して立ち上っている。また、住居西壁に高さ6cm、幅10cmの階段状の張り出しが存在する。

床 ほぼ平坦で、竈2の前面からP1にかけて、よく踏み固められている。また、壁溝は検出されていない。

竈 東壁中央部に竈1、北壁中央部に竈2が付設されている。竈1は袖部が残存しており、焚口から煙道部まで110cmほどで、袖部幅130cmである。煙道部は壁外へ26cm掘り込まれ、外傾して立ち上っている。袖部は14~20層で、粘土を主体とした袖部の芯材を構築し、その周りを包むようにローム・粘土・砂で袖部を構築している。火床部は床面から8cmほど皿状に掘り下げ、火熱により赤変硬化している。また、竈2は壁外に40cmほど掘り込まれた煙道部が残存しているだけで、袖部や火床部の残りは見られない。竈2から竈1への作り替えが考えられる。

#### 竈1土壤解説

1	褐色	褐色粘土粒子中量、ローム粒子少量、燒土粒子少量	10	灰褐色	ローム粒子、燒土粒子、褐色粘土粒子、砂粒少量
2	褐色	燒土粒子中量、ローム粒子、燒土粒子少量、炭化粒子微量	11	明赤褐色	燒土ブロック微量
3	暗赤褐色	燒土粒子中量、褐色粘土粒子少量、燒土ブロック	12	褐色	ローム粒子微量
4	暗赤褐色	燒土粒子中量、炭化粒子、褐色粘土粒子少量、ローム粒子微量	13	墨褐色	炭化粒子少量、燒土粒子微量
5	褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子微量	14	暗赤褐色	燒土粒子多量、ローム粒子、粘土粒子少量、炭化粒子、砂粒微量
6	灰褐色	褐色粘土粒子少量、ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子、砂粒微量	15	暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、粘土粒子微量
7	灰褐色	褐色粘土粒子少量、ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子、砂粒微量	16	灰褐色	ローム粒子、燒土粒子少量、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量
8	灰褐色	燒土粒子、褐色粘土粒子、燒土粒子、砂粒少量、ローム粒子、炭化粒子微量	17	灰褐色	砂粒粒子少量、ロームブロック、砂粒微量
9	明赤褐色	燒土粒子多量、ローム粒子、炭化粒子少量、褐色粘土粒子微量	18	灰褐色	ローム粒子、燒土粒子、砂粒微量
			19	暗褐色	ローム粒子微量
			20	灰褐色	砂粒ブロック中量、ローム粒子、燒土粒子微量



第9図 第3号住居跡実測図

**ピット** 1か所。南に段差を持つピットで、北側が一段低くなり、深さ30cmほどである。南壁よりの中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

**覆土** 12層からなる。第1～3層は、覆土の硬化の状態などから第4号住居跡の貼床であり、第4層からは埋土と考えられる。

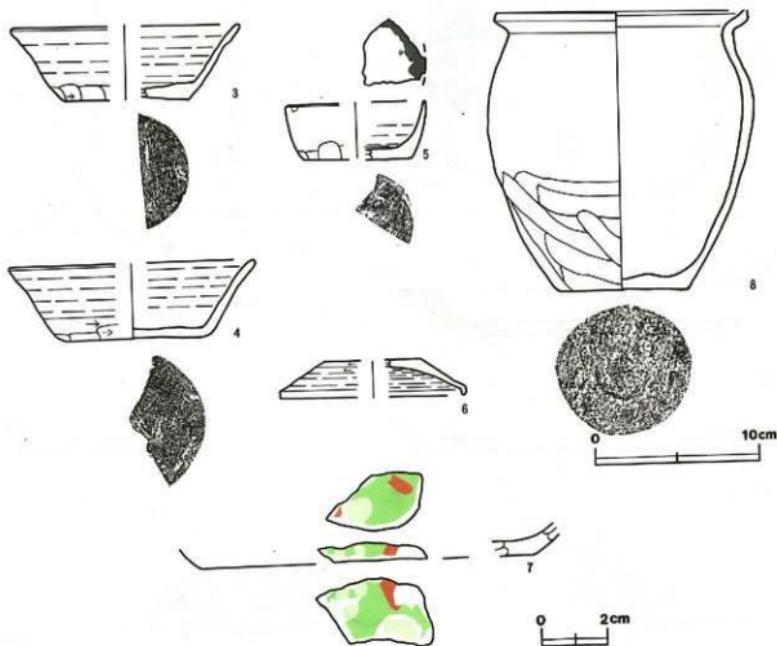
#### 土層解説

1 白 色	ロームブロック多量	7 明 暗 色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰 色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	8 暗 色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 黄 色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	9 暗 色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 灰 黄 色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	10 暗 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 にじみ色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	11 明赤褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量
6 暗 色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	12 明 暗 色	ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土師器片156点（坏16, 高台付盤3, 盖1, 壺135, 小型壺1), 須恵器片39点（坏28, 高台付盤1, 盖4, 壺6) がほぼ全城から散在した状態で出土している。全体的に覆土中・下層からの出土が多い。5は南

壁際、7はほぼ中央部の床面からそれぞれ検出されている。3・4・6・8は窓内から出土し、8は遺棄されたものと考えられる。また、付近からは炭化種子が検出されている。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



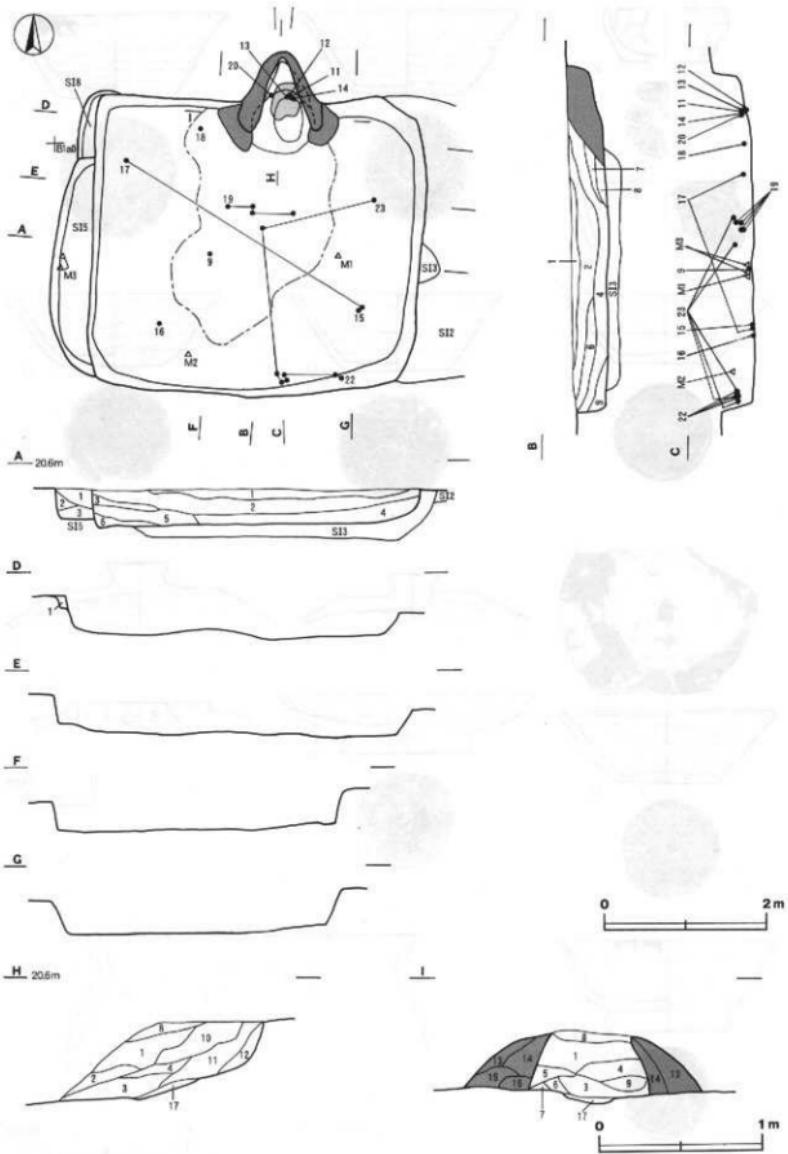
第10図 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第10図)

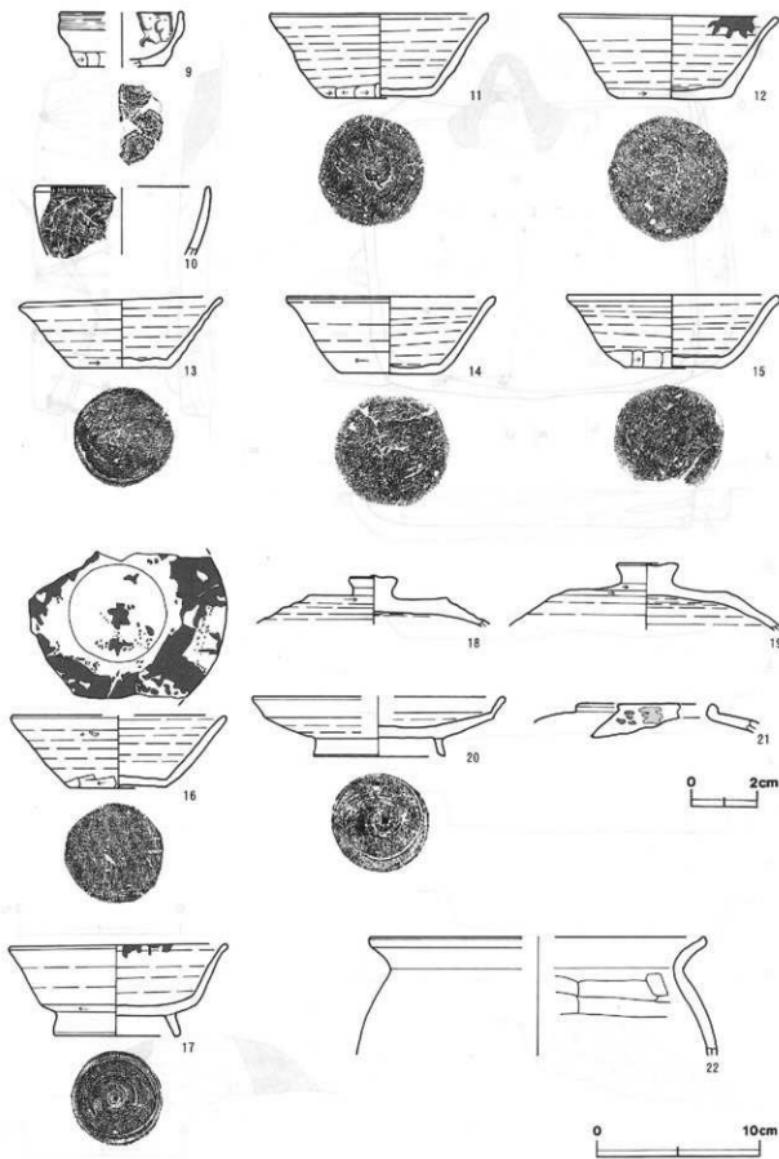
番号	種別	器種	口径	底高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	壺	[13.0]	4.5	[7.6]	石英-長石-雲母	褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面下端へラ削り	窯火床部	60%
4	土師器	壺	[14.8]	4.6	8.4	石英-長石-雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面下端へラ削り	窯火床部	30%
5	土師器	壺	[8.4]	3.4	[6.6]	長石-赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面下端へラ削り	南壁窯床部	40% PL9 油煙付着
6	須恵器	蓋	[11.4]	(2.2)	—	石英-長石	褐灰	良好	天井割回転へラ削り 口縁部クロナブ	窯火床部	30%
7	三彩陶器	托	—	(1.0)	[10.2]	鐵青	淡黄澄	良好	体部外面下端横ナデ	中央剖床面	5% PL9 内外面施釉
8	土師器	小壺	15.2	17.2	8.3	石英-長石-雲母	にぬい褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面下位へラ削り	窯火床部	90% PL8

第4号住居跡(第11図)

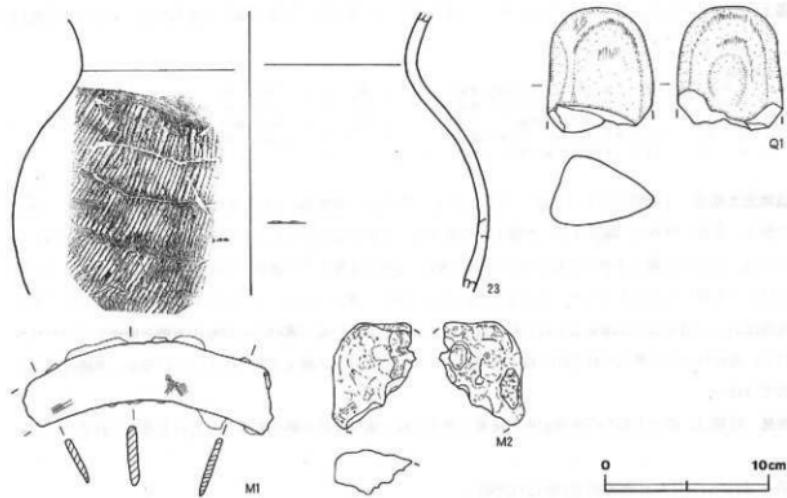
位置 調査区北東部のB 1a0区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。



第11図 第4・5・8号住居跡実測図



第12図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第13図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

**重複関係** 第2号住居跡の西部、第5号住居跡と第8号住居跡の東部を掘り込み、本跡の床下には拡張前の第3号住居跡が重複している。

**規模と形状** 長軸4.07m、短軸3.60mの長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は38~45cmで、直立して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、中央部の南から竈前面にかけての床面がよく踏み固められている。壁溝は検出されていない。  
**竈** 北壁中央部よりやや東に敷設されている。規模は、焚口から煙道部まで1.2m、袖部幅は1.45mほどである。煙道部は壁外へ0.55mほど掘り込まれ、焚口から緩やかに立ち上がり、煙道部で急激に立ち上がる。上層は17層からなり、第1~12層までが覆土であり、第13~16層までが袖部の構築材、第17層が火床部層である。覆土は褐色粘土粒子が多量に混入し、焼土粒子や炭化粒子も混在し、含有物の乱れた堆積状況を示している。第13層の火床部は床面から6cmほど直立に掘り下げ、火熱により赤変硬化工している。第16層は地山の掘り残しと褐色粘土を用いて袖部の基部をなし、その上に第14、15層で袖部本体を構築している。

#### 竈土層解説

1	暗褐色	褐色粘土粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	10	にぶい褐色	粘土粒子少量、炭化物微量
2	褐色	褐色粘土粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	11	にぶい褐色	焼土粒子少量、炭化物・粘土粒子微量
3	暗褐色	褐色粘土粒子中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量	12	にぶい褐色	ロームブロック・粘土粒子微量
4	暗褐色	焼土粒子多量、褐色粘土粒子中量、炭化粒子微量	13	暗赤褐色	焼土粒子・ローム粒子中量
5	にぶい褐色	褐色粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	14	褐色	褐色粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子微量
6	にぶい褐色	褐色粘土粒子中量、焼土粒子少量	15	褐色	褐色粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7	褐色	ローム粒子多量	16	暗褐色	褐色粘土粒子多量、炭化粒子少量、炭化粒子微量
8	暗褐色	褐色粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	17	明褐色	ローム粒子多量
9	にぶい褐色	褐色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量			

**ピット** 調査した範囲では確認されない。

**覆土** 9層からなり、含有物はロームブロックを主体とし、焼土粒子や炭化粒子も混入する、レンズ状の堆積をした自然堆積である。

**土層解説**

1	暗褐色	ローム粒子少景、焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
3	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	8	褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量			

**遺物出土状況** 土師器片143点(坏10, 高台付坏1, 壶132), 須恵器片69点(坏39, 高台付坏2, 壶3, 高台付盤1, 盖6, 魁18), 陶器3点, 鉄鎌1点や鉄滓などが南西部以外のL字状の範囲に比較的集中して出土している。これらは覆土中層・下層からの出土が多い。10・21は覆土中の遺物である。17・18・19・22・23・M2は上・中層からの出土であり、ほかから流れ込んだものと考えられる。9は中央部, 15は南東部から, 16は南西部から, M1は中心部東寄りのそれぞれ床面より出土している。窓内からは転用支脚を構成していた11~14と、流れ込んだと考えられる20・Q1が検出されている。ほかに網文土器も出土しているが、本跡に伴うものではない。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中～後葉と考えられ、第3号住居跡を拡張したものと考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表(第12・13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	土師器	坏	[7.4]	3.4	[5.4]	長石・雲母	浅黄褐	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り	覆土中	20% 油煙付着
10	土師器	坏	[10.6]	4.2	—	石英	にふい程	普通	口縁部模ナデ	覆土上中	10% 模刻有す
11	須恵器	坏	13.3	5.2	6.4	石英・長石・雲母	褐灰	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り	竪火床部	100% PL8
12	須恵器	坏	13.6	6.1	7.0	石英・長石・雲母	褐灰	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り	竪火床部	100% PL8 油煙付着
13	須恵器	坏	12.1	4.4	6.0	石英・長石・雲母	にふい黄褐	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り	竪火床部	100% PL8
14	須恵器	坏	13.0	4.8	6.0	石英・長石・雲母	にふい黄褐	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り	竪火床部	90% PL8
15	須恵器	坏	12.8	4.5	6.0	石英・長石・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り	南東側床面	80% PL8
16	須恵器	坏	[13.2]	4.4	6.0	石英・長石	褐灰	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り	南西側床面	90% PL8 油煙付着
17	土師器	高台付坏	13.3	5.8	7.6	石英・長石・雲母・赤色粒子	にふい黄褐	普通	口縁部模ナデ、体部外腹下端へラ削り、高台貼り付け	覆土中	60% PL9 油煙付着
18	須恵器	蓋	—	(3.1)	—	石英・長石・雲母	灰黒	普通	天井部模ナデへラ削り	覆土中層	80% PL9
19	須恵器	蓋	—	(4.0)	—	石英・長石・雲母	灰	良好	天井部模ナデへラ削り	覆土中層	70% PL9
20	須恵器	高台付盤	[13.3]	3.7	8.0	石英・長石・雲母	灰黒	普通	口縁部模ナデ高台貼り付け	竪中層	60% PL9
21	三彩陶器	小盤	[4.0]	(0.9)	—	鐵密	浅黄褐	普通	口縁部模ナデ外腹上位削り	覆土中	5% PL9 外面施釉
22	土師器	甕	[20.4]	(7.3)	—	石英・長石・雲母・赤色粒子	褐	普通	口縁部模ナデ、体部内面へラ削り	覆土中層	5%
23	須恵器	甕	—	(17.1)	—	長石・雲母・赤色粒子	にふい褐色	普通	口縁部模ナデ、輪様小痕	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	磨石	(7.6)	6.5	4.2	(274.7)	安山岩	一部欠損	覆土中	PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鎌	(15.4)	3.8	0.2~0.6	76.3	鉄	切先欠損、刃部弯曲、基部は折り曲げである	中央側床面	PL10
M2	鉄滓	6.4	(5.2)	2.7	(104.1)	鉄	鉄形洋	覆土上層	

### 第5号住居跡（第11図）

位置 調査区の北東部のB 1 a0区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 第8号住居跡の南側の大部分を掘り込み、第3・4号住居跡に東側の大部分を掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.64m、短軸0.5mの方形もしくは長方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は38cmで、各壁とも直立して立ち上がる。

床 平坦であるが、東側の大部分については不明である。現状では硬化した床面や、壁溝は確認されない。

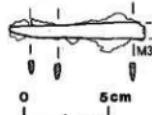
竈 現状では確認されない。

ピット 現状では確認されない。

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積する自然堆積である。

#### 土層解説

1	暗褐色	燒土粒子微量
2	褐色	ローム粒子中量
3	暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子微量



第14図 第5号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 鉄製品（刀子1）が西壁中央部の床面より割れた状態で出土するのみである。

所見 本跡は遺物がわずかため断定できないが、第3・4号住居跡に掘り込まれていることから9世紀中葉以前につくられたものと考えられる。

### 第5号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	器種	全長	刀身長	身幅	重ね	基長	重量	材質	特徴	出土位置	備考
MS	刀子	(8.4)	(8.4)	1.1	0.4	—	6.8	鉄	基部欠損	中央部床面	

### 第8号住居跡（第11図）

位置 調査区の北東部のB 1 a0区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 第5号住居跡に南側の大部分を掘り込まれ、第3・4号住居跡に東側の大部分を掘り込まれている。

規模と形状 長軸0.8m、短軸0.2mの方形または長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は14cmで、直立して立ち上がる。

床 平坦であるが、東側の大部分については不明である。現状では硬化した床面や、壁溝は確認されない。

竈 現状では確認されない。

ピット 現状では確認されない。

覆土 1層のみであり、現状からの土層堆積の観察は困難である。

#### 土層解説

1	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
---	----	--------------

遺物出土状況 現状では確認されない。

所見 第3・4・5号住居跡に掘り込まれており、これらの住居跡より古いと考えられるので、9世紀中葉以前と考えられる。

表3 奈良・平安時代住居跡一覧表

編 番 号	位 置 (長軸 方向)	平 面 形	規 模(m) (長軸×短軸)	壁 高 (cm)	床 面	壁 構 造 (柱穴、火口、ビット)	内 部 施 設 (窓、竪窓)	覆 土	主 な 出 土 遺 物	時 期	備 考
2 B2a1	N-0° [方 形]	3.54 × (1.06)	8	平坦	—	—	—	—	自然 漆器	9世紀初葉以前	本跡→S13-4
3 B1a0	N-90°-E 長方形	3.57 × 2.76	48	平坦	—	1	—	竪2	人為 七頭鶴、飛鳥、三彩	9世紀中葉	S12→本跡→S14
4 B1a0	N-5°-E 矩形	4.07 × 3.60	38~45	平坦	—	—	—	竪1	自然 上部器、漆器、三彩	9世紀後半	S12-9→S15→S13→本跡
5 B1a0	N-6°-E [方 形]	2.64 × (0.5)	38	平坦	—	—	—	—	自然 鉄製品	9世紀中葉以前	S12-8→本跡→S13-4
8 B1a0	N-5°-E [方 形] (0.80) × (0.20)	14	平坦	—	—	—	—	—	—	9世紀中葉以前	本跡→S15→S13-4

## (2) 鋳冶工房跡

## 第1号鋳冶工房跡 (第15・16図)

位置 調査区の南東部のB 1 f9区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 第33号土坑に北西部を掘り込まれ、擾乱と、削平により南西部は明確でない。

規模と形状 長軸2.85m、短軸2.72mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は16~32cmで、直立して立ち上がる。南東部は調査区外に延びている。

床 ほぼ平坦で、中央部から南西に向かって床面がよく踏み固められている。壁構は検出されていない。

鋳冶炉 床面下の掘り方面から確認される。中央部よりやや南東に敷設され、規模は長軸86cmほど、短軸62cmほどの楕円形で、床面を30cmほど掘りくぼめ、粘土を貼り付けた炉である。炉床は高温の火熱のため溶け出した鉄が付着し、青変硬化している。また、炉の周辺の床面が赤変している。また、炉の周辺を堀り方の高さまで掘り下げると、北と東に溝状の凹みがみられた。本跡の遺物としては確認できなかった羽口を装着した凹みと考えられる。土層は3層からなり、第1層が青変化した層で鉄分がかなり付着している。そのまわりを赤変した第2層が巡っている。第3層は鋳冶炉構築時の土台と考えられる。

## 灰土層解説

1 黒褐色 粘土多量

3 黄褐色 粘土粒子多量

2 砂褐色 粘土粒子多量、粘土ブロック少量

ピット 1カ所。堀り方床面のはば中央部、鋳冶炉の南西に位置している。平面的に見るとひょうたん状に掘り込まれており、南側が一段低くなっている。北側の掘り込みは直径84cmほどの円形で、深さは16cmである。南側の掘り込みは長軸82cm、短軸64cmの楕円形で、50cmほど掘り込んでいる。堆積土層は14層からなり、焼土・炭化物を主体とした覆土で、層序は粘土ブロックが混入するなど不安定であり、人為堆積と考えられる。

また、2つの掘り込みは堆積土層に断続が見られなかつたため単一のピットととらえた。

## ピット土層解説

1 黑褐色 粘土粒子・粘土粒子少量

8 黑褐色 焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化物微量

2 黑褐色 粘土粒子中量

9 黑褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化物微量

3 暗褐色 粘土粒子中最、粘性強

10 灰褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量

4 灰褐色 烧土粒子・炭化粒子微量

11 灰褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

5 暗褐色 粘土粒子中量

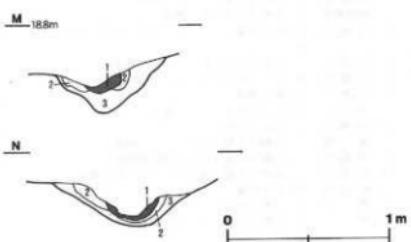
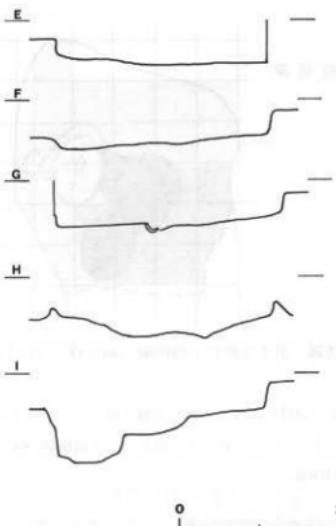
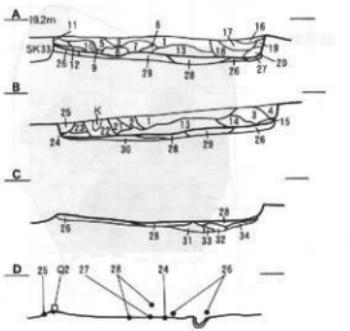
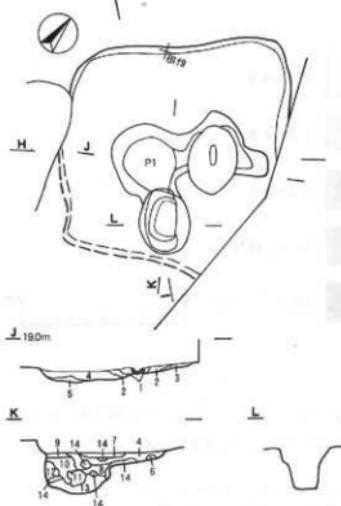
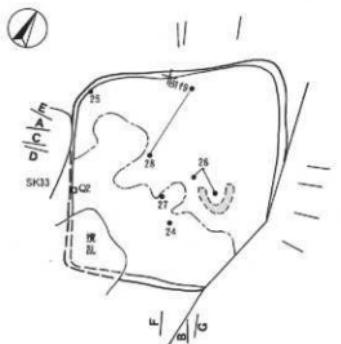
12 暗褐色 粘土粒子少量

6 暗褐色 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

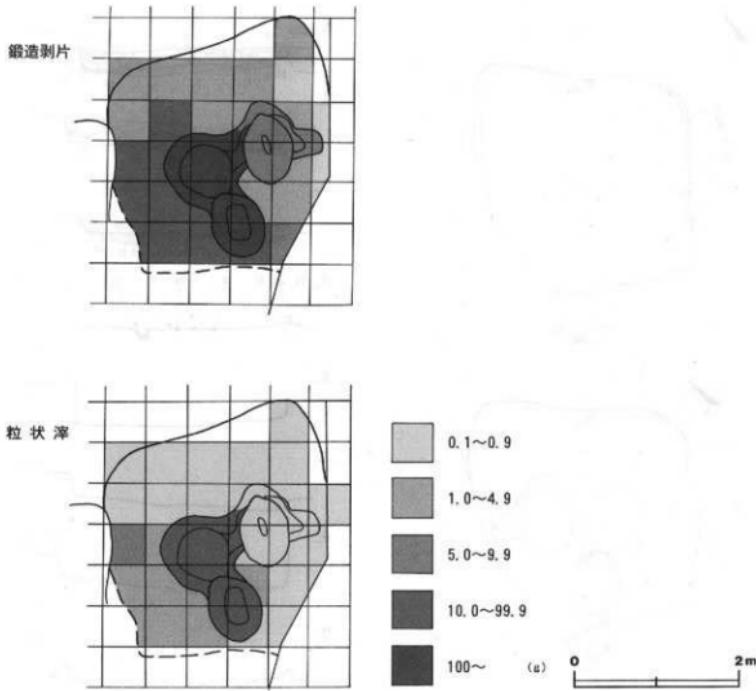
13 灰褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック微量

7 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量

14 明褐色 ロームブロック多量



第15図 第1号鍛冶工房跡実測図

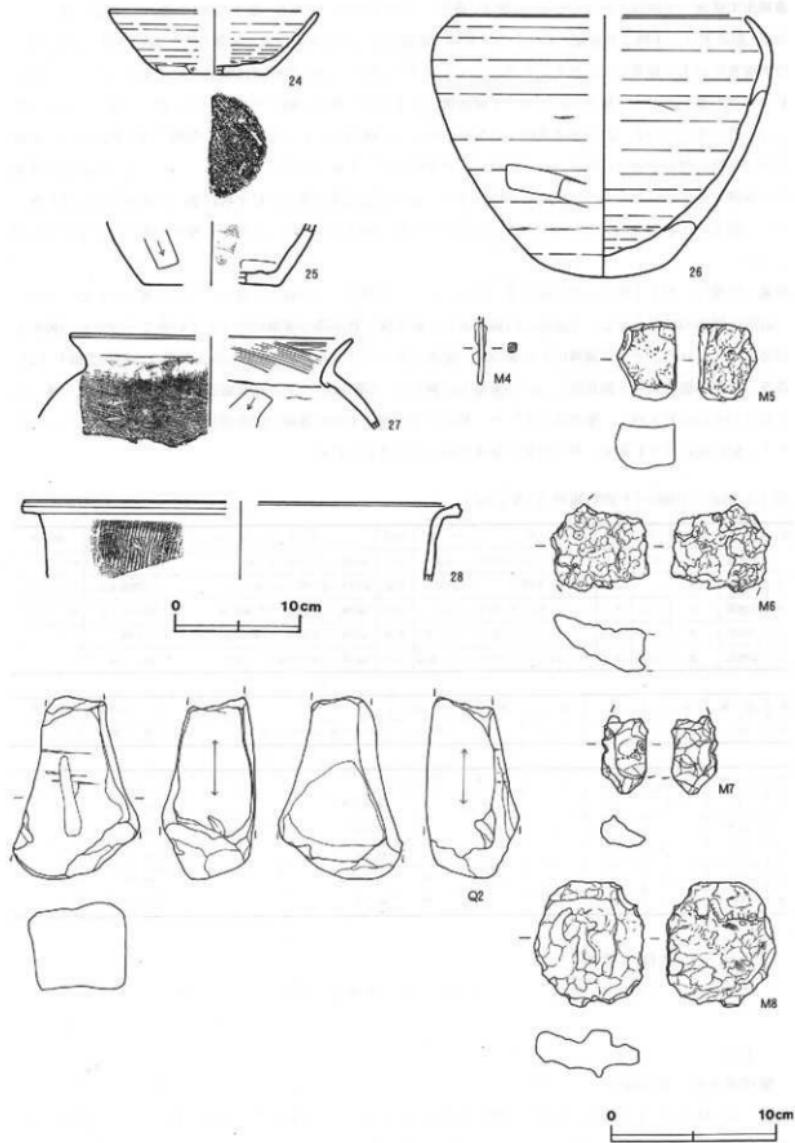


第16図 第1号鍛治工房跡铸造剥片・粒状滓出土分布図

覆土 34層からなり、26~34層は堀り方の埋め土であり、これらは堅くしまっている。含有物は焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックが混在し、土層堆積の層序も安定しないことから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- |        |                          |         |                                |
|--------|--------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 塗褐色  | ローム粒子・焼土粒子微量             | 18 暗褐色  | 炭化粒子少量、焼土粒子・粘土ブロック微量           |
| 2 塗褐色  | ローム粒子少量                  | 19 暗褐色  | ローム粒子・炭化粒子微量                   |
| 3 塗褐色  | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量      | 20 暗褐色  | 炭化粒子少量、焼土粒子微量                  |
| 4 塗褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量           | 21 楊暗褐色 | 焼土粒子微量                         |
| 5 楊暗褐色 | ローム粒子、炭化粒子微量             | 22 黒褐色  | 炭化粒子微量                         |
| 6 塗褐色  | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 23 黑褐色  | 粘土粒子少量                         |
| 7 塗褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量        | 24 黑褐色  | 粘土粒子中量                         |
| 8 塗褐色  | 焼土粒子・粘土粒子少量              | 25 楊暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量                 |
| 9 暗褐色  | 炭化粒子微量                   | 26 暗褐色  | 粘土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子・白色粘土ブロック微量 |
| 10 灰褐色 | 炭化粒子・粘土ブロック微量            | 27 暗褐色  | 粘土粒子中量、炭化粒子微量                  |
| 11 暗褐色 | ローム粒子少量                  | 28 暗褐色  | 粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量           |
| 12 黑褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック微量         | 29 暗褐色  | 粘土粒子少量、焼土粒子微量                  |
| 13 黑褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量        | 30 楊暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量               |
| 14 紫褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量      | 31 黑褐色  | 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量             |
| 15 紫褐色 | 粘土粒子中量                   | 32 黑褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量              |
| 16 黑褐色 | ローム粒子中量                  | 33 深黄褐色 | 粘土ブロック多量                       |
| 17 黑褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子微量           | 34 黑褐色  | 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量             |



第17図 第1号鍛冶工房跡出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片58点(坏4, 高盤4, 壺50), 須恵器片38点(坏9, 瓶1, 鉢1, 壺27), 石器(砥石1), 鉄滓・鍛造剥片が本跡より確認されている。鉄滓・鍛造剥片などは床面全域から散在して検出されているため、建物廃棄直前まで操業していたものと考えられる。また、ほかの出土遺物は比較的北部に集中している。24はP1南側の覆土面上より検出され、27の土師器壺はP1北側の覆土上層より検出。28は破片が覆土上層より散らばって出土している。25は須恵器鉢で北西壁の床面より検出されているが、器の内側に付着物があり、金属を溶かす際の堆塗と考えられる。Q2の砥石は西壁中央部の下層より出土している。これら2つの鍛冶関係遺物が本跡で使用されたものかは不明である。また、26の須恵器鉢は焼土がU字状に廻った床面の中心部を掘り込んで据えた状態で検出している。器面には焼けた形跡は確認できなかったため、周りの焼土との関係は不明である。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。本跡は上下2層の床面からなると考えられる。上面は一般的な建物の様相を呈し、下面からは鍛造剥片、粒状滓、鉄滓等が多量に出土していることなどから鍛冶工房跡と考えられる。そこで遺構内の作業空間の配置を明らかにするため、覆土を50cm方眼で分割して取り上げ、洗浄したち鍛造剥片と粒状滓について重量を計測した。(第16図)。その結果鍛造剥片、粒状滓とともに多く出土しているのはP1内と、南西部であった。特にP1の覆土中から多量の鍛造剥片、粒状滓が検出していることと、炉に近いこともあり、P1付近に金床があったと考えられる。

第1号鍛冶工房跡出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	沿縁	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
24	須恵器	壺	[12.6]	3.9	[6.4]	石英-長石-雲母	灰黄	良好	口縁部横ナギ, 体部外側下端へフ削り	P1上層	40%
25	須恵器	鉢	—	(3.9)	[8.2]	石英-長石	浅黄	普通	体部外斜面下端へフ削り, 内底下層へナギ	北西部床面	30% PL9
26	須恵器	鉢	[17.6]	16.0	—	石英-長石-雲母	灰白	良好	口縁部横ナギ, 体部外側へナギ, 脱釉み風	鍛冶炉上層	30% PL8
27	土師器	壺	[17.0]	(5.5)	—	石英-長石-雲母	にじ・根	普通	口縁部横ナギ, 体部外側へケ削り, 脱釉み風	P1上層	10%
28	須恵器	壺	[36.2]	(6.4)	—	石英-長石-雲母	にじ・黄橙	普通	口縁部横ナギ, 体部外側裏側の平行切	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砥石	(11.1)	7.6	5.2	(517.8)	磁炭岩	2面使用, 縦条痕あり, 欠損	覆土下層	PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	釘	(3.8)	0.3	0.3	(1.8)	鉄	基部丸頭	鍛冶炉内	
M5	鉄滓	4.7	3.5	2.8	82.3	鉄	塊形滓	鍛冶炉内	PL10
M6	鉄滓	(5.4)	6.0	3.4	(77.8)	鉄	塊形滓	鍛冶炉内	PL10
M7	鉄滓	(4.8)	2.7	1.8	(28.4)	鉄	塊形滓	鍛冶炉内	PL10
M8	鉄滓	7.7	6.7	2.9	122.7	鉄	塊形滓	鍛冶炉内	PL10

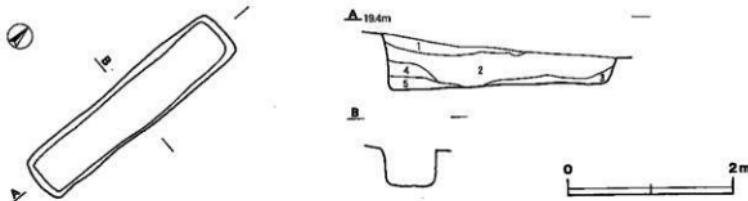
### 3 近世の遺構と遺物

今回の調査で、上坑2基を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記述する。

#### 土坑

##### 第30号土坑(第18図)

**位置** 調査区南部のB1f7区に位置し、標高19.0mの台地平坦部に立地する。東側に第33号土坑が隣接する。  
**規模と形状** 長軸2.9m, 短軸0.66mの長方形を呈し、長軸方向はN-8°-Eで、深さは0.44mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。



第18図 第30号土坑実測図

**覆土** 5層からなる。ローム・粘土ブロックを主体とした堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

1	褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量 ロック微量
2	暗 棕 色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、炭化物微量 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片1点(壺1)が出土しているが、流れ込みと考えられる。

**所見** 遺物が出土していないため時期決定が困難であるが、規模や形状などから、近世のイモ穴と考えられる。

**第33号土坑 (第19図)**

**位置** 調査区南部のB 1 f8区に位置し、標高19.0mの台地平坦部に立地する。西側に第30号土坑が隣接している。

**重複関係** 北東部は第1号鍛冶工房跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸2.06m、短軸0.68mの長方形を呈し、長軸方向はN-0°で、深さは12~30cmほどである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

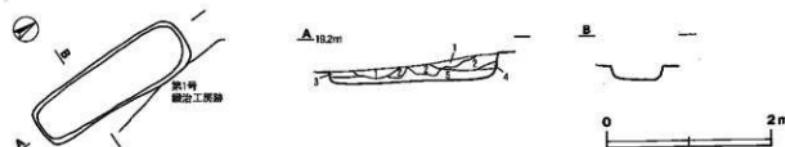
**覆土** 5層からなる。ローム・粘土粒子を主体とした堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

1	暗 棕 色	ローム粒子少量、灰白色粘土ブロック微量
2	暗 棕 色	ローム粒子少量、灰白色粘土粒子微量
3	暗 棕 色	ロームブロック微量

**遺物出土状況** 須恵器片1点(壺1)が出土しているが混入であり、本跡に伴うものではなく、小片のため、図示できない。

**所見** 本跡に伴う遺物が出土していないため時期決定が困難であるが、規模や形状などから、近世のイモ穴と考えられる。



第19図 第33号土坑実測図

表4 近世土坑一覧表

位置	主軸方向 (長軸方位)	平面形 (長軸×短軸)	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (古→新)
30	B177	N-8°-E	長方形	2.9 X 0.66	44	外傾	平坦	人為	
33	B1f8	N-0°	長方形	2.06 X 0.68	12~30	外傾	平坦	人為	第1号鍛冶工房跡→本跡

#### 4 その他の時代の遺構と遺物

今回の調査で、土坑32基、溝4条を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 土坑

遺構に伴う遺物が検出されなかつたため時期を特定することができない土坑を、一覧表及び実測図で掲載する。

###### 第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 4 黄褐色 ロームブロック中量

###### 第2号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子微量
- 2 黄褐色 ローム粒子微量、粘土ブロック多量

###### 第3号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子少量
- 2 黄褐色 ロームブロック微量
- 3 黄褐色 ローム粒子微量

###### 第5号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黄褐色 ローム粒子少量

###### 第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黄褐色 ロームブロック中量
- 4 黄褐色 ローム粒子微量

###### 第7号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子少數
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 黄褐色 ローム粒子中量

###### 第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黄褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

###### 第9号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黄褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

###### 第10号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量
- 2 黄褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黄褐色 ローム粒子微量

###### 第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 黄褐色 ローム粒子中量

###### 第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黄褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

###### 第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黄褐色 ロームブロック中量
- 4 黄褐色 ローム粒子中量

###### 第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黄褐色 ロームブロック少量
- 3 黄褐色 ロームブロック中量

###### 第15号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黄褐色 ローム粒子少量

###### 第16号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 黄褐色 ローム粒子中量

###### 第17号土坑土層解説

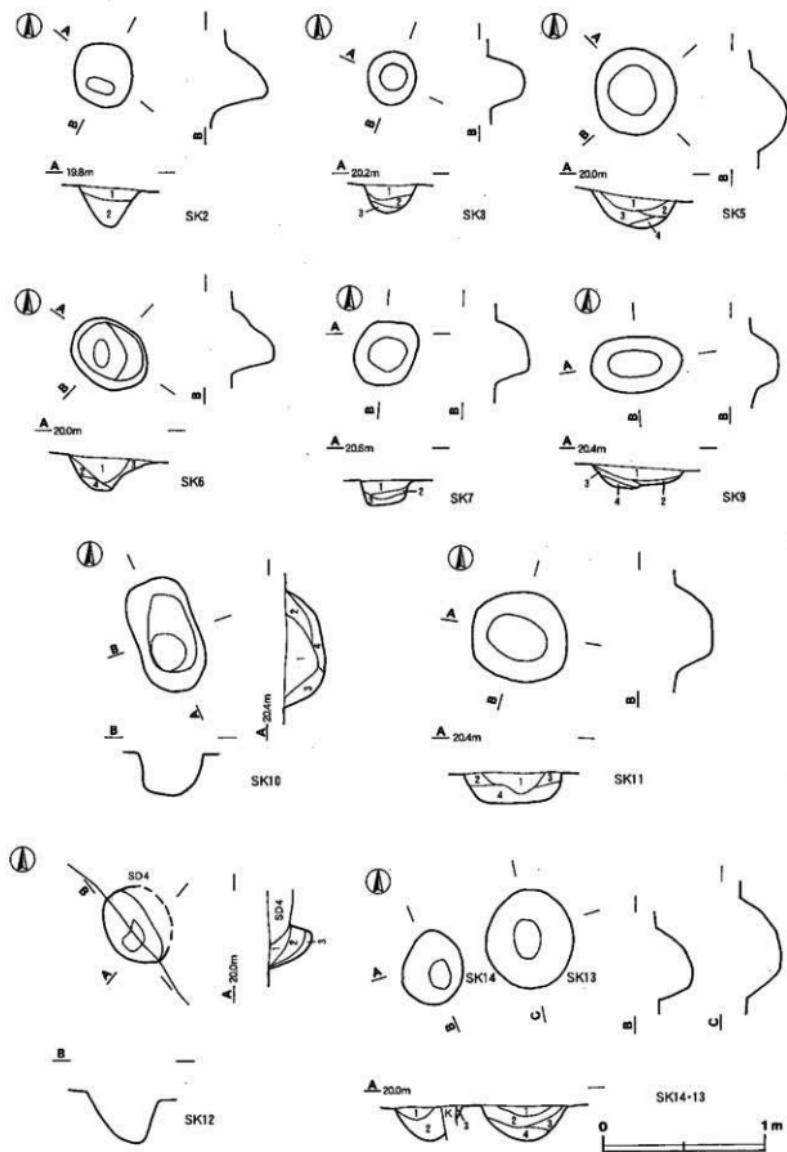
- 1 黄褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黄褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

###### 第18号土坑土層解説

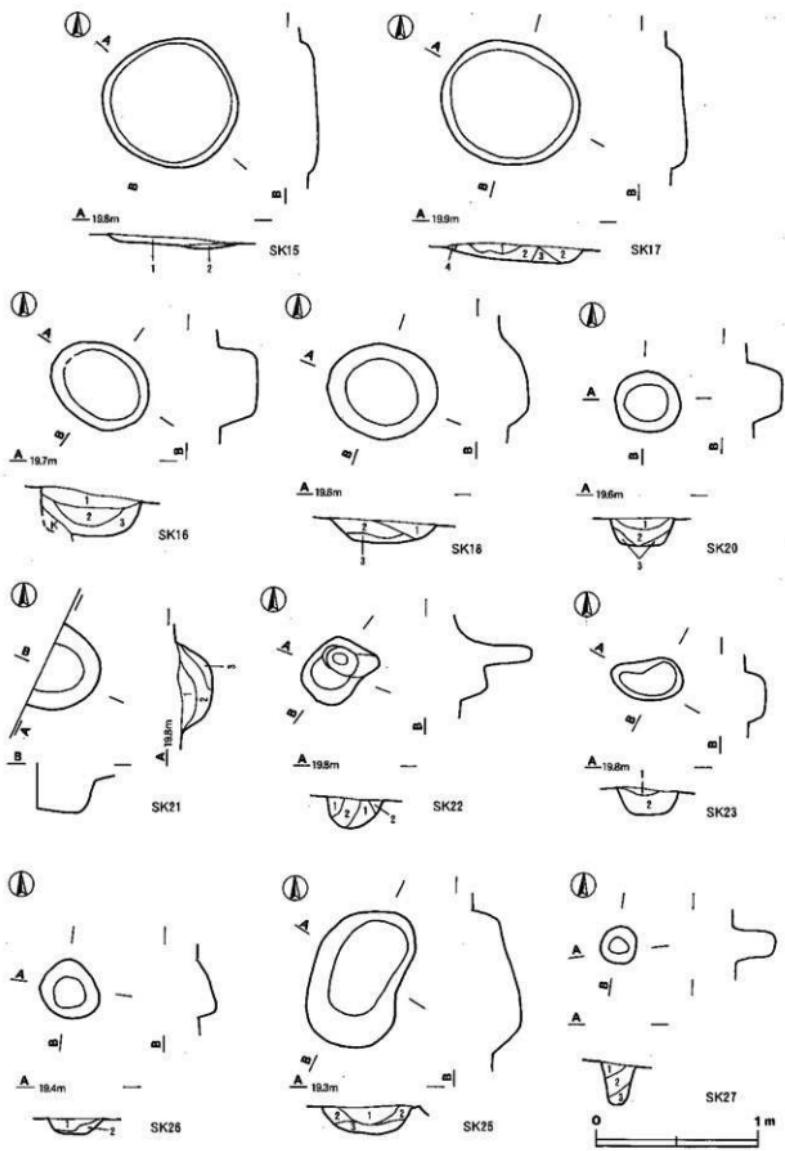
- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黄褐色 ローム粒子中量

###### 第20号土坑土層解説

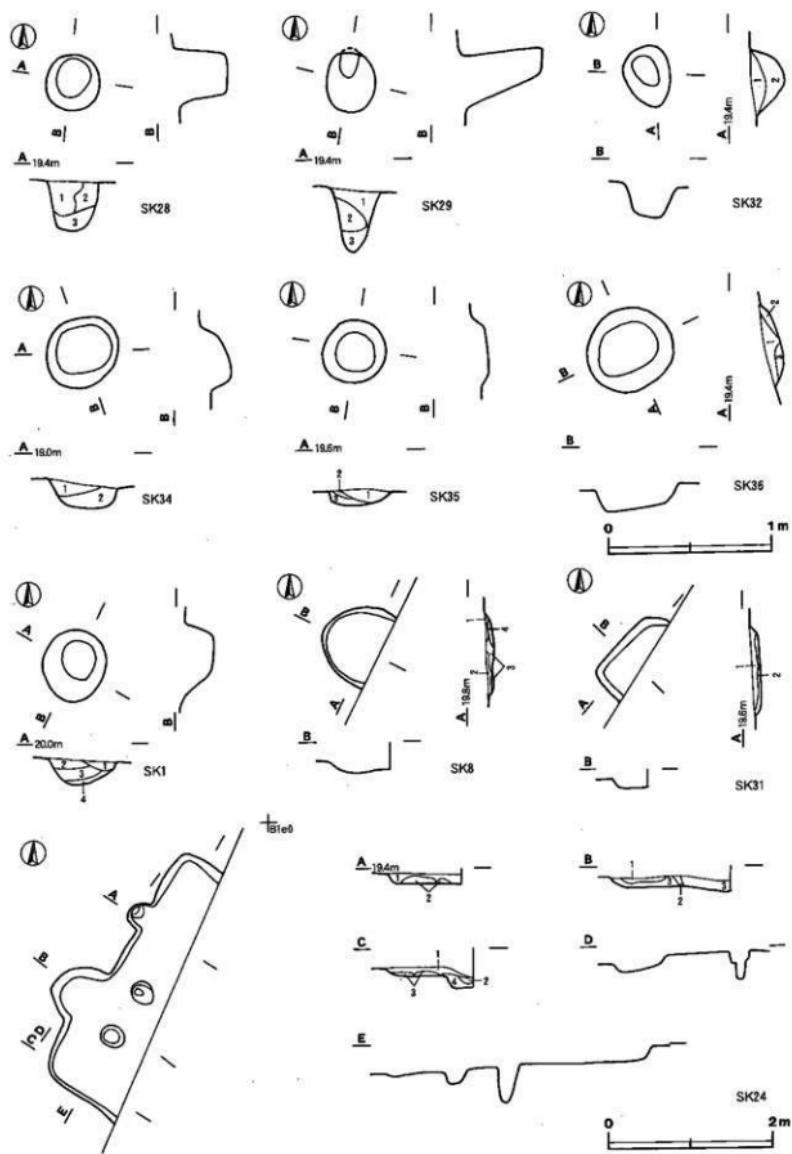
- 1 黄褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量



第20図 その他の土坑実測図(1)



第21図 その他の土坑実測図(2)



第22図 その他の土坑実測図(3)

## 第21号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量  
3 黄褐色 ロームブロック少量

## 第22号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量  
2 黄褐色 ロームブロック中量

## 第23号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量

## 第24号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量  
2 黄褐色 ロームブロック中量  
3 暗褐色 ローム粒子少量  
4 黄褐色 ロームブロック少量

## 第25号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量  
2 暗褐色 ローム粒子微量  
3 黄褐色 ローム粒子少量

## 第26号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量  
2 黄褐色 ローム粒子少量

## 第27号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量  
2 暗褐色 ローム粒子微量  
3 黄褐色 ロームブロック中量

## 第28号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック微量  
3 暗褐色 ロームブロック少量

## 第29号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量  
3 暗褐色 ロームブロック少量

## 第30号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック少量

## 第32号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ロームブロック少量  
2 黄褐色 ローム粒子少量

## 第34号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック・燒土粒子少量

## 第35号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量  
3 黄褐色 ローム粒子多量

## 第36号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック微量  
2 暗褐色 ローム粒子多量  
3 暗褐色 ロームブロック中量

表5 その他の土坑一覧表

土坑番号	位質	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深度 (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (旧→新)
1	A2e1	N-14°-E	椭円形	0.9 × 0.82	35	外傾	平坦	自然		
2	A1g0	—	円形	0.42 × 0.39	29	緩斜	皿状	人為		
3	B1b9	—	円形	0.32 × 0.32	22	外傾	皿状	自然		
5	B1c9	—	円形	0.32 × 0.50	22	緩斜	皿状	自然		
6	B1c9	N-55°-W	椭円形	0.62 × 0.40	26	外傾	皿状	人為		
7	A1j0	—	円形	0.44 × 0.40	20	外傾	平坦	自然		
8	B1d0	N-24°-E	[椭円形]	1.00 × (0.80)	14	緩斜	平坦	人為		
9	B1a9	N-82°-E	椭円形	0.56 × 0.34	14	緩斜	平坦	自然		
10	B1a9	N-25°-W	椭円形	0.72 × 0.40	26	外傾	皿状	自然		
11	B1c8	—	円形	0.60 × 0.54	22	外傾	平坦	人為		
12	B1c9	N-37°-W	椭円形	0.52 × 0.42	29	外傾	皿状	自然		本跡→SD4
13	B1c8	N-12°-W	椭円形	0.63 × 0.54	23	緩斜	平坦	自然		
14	B1e8	N-13°-W	椭円形	0.46 × 0.40	24	外傾	平坦	人為		
15	B1d8	—	円形	0.82 × 0.81	8	緩斜	平坦	自然		
16	B1e8	N-57°-W	椭円形	0.64 × 0.50	24	外傾	平坦	自然		
17	B1d9	N-62°-W	椭円形	0.88 × 0.76	10	緩斜	平坦	人為		
18	B1d9	N-65°-W	椭円形	0.68 × 0.58	14	緩斜	平坦	自然		
20	B1e8	—	円形	0.40 × 0.36	20	外傾	平坦	自然		
21	B1d7	N-22°-E	[椭円形]	0.56 × (0.32)	21	外傾	平坦	自然		
22	B1d9	N-37°-E	不整椭円形	0.44 × 0.34	44	外傾	凹凸	人為		

土坑番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規格(m) (長軸×短軸)	深さ (m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (旧→新)
23	B1e8	N-82°-E	椭円形	0.44 × 0.24	12	外傾	平坦	自然		
24	B1e9	N-32°-E	不整形	3.28 × (1.06)	10~18	外傾	平坦	自然		
25	B1e9	N-28°-E	椭円形	0.90 × 0.58	20	外傾	平坦	自然		
26	B1e8	N-35°-W	椭円形	0.38 × 0.30	10	縦斜	平坦	自然		
27	B1f8	—	円形	0.24 × 0.22	26	外傾	平坦	人為		
28	B1f8	—	円形	0.34 × 0.32	32	外傾	平坦	人為		
29	B1f7	—	円形	0.36 × 0.32	50	外傾	平坦	人為		
31	B1d9	N-49°-E [長方型]	1.12 × (0.48)	16	縦斜	平坦	人為			
32	B1f8	N-23°-W	椭円形	0.36 × 0.28	20	外傾	平坦	人為		
34	B1g7	—	円形	0.46 × 0.42	15	外傾	平坦	自然		
35	B1f6	—	円形	0.40 × 0.38	8	外傾	平坦	自然		
36	B1f7	—	円形	0.54 × 0.51	16	外傾	平坦	人為		

## (2) 溝跡

### 第1号溝 (第23図)

位置 調査区北東部のA 2 i1~B 2 b1区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 第2号住居跡の南東部と第5号溝の上端を掘り込み、東側を第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 調査区の東部北寄りを北方向 (N-6°-E) へ直線的に延びている。確認された長さは5.8mほどで、南端はさらに南へ延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅0.4~0.8mで、深さ0.16~0.20mであり、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなる。層序はレンズ状を呈した自然堆積である。

#### 土層解説

1 緑褐色 ローム粒子少量

2 緑褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片6点(壺2, 壺4), 須恵器片2点,(壺1, 壺1)が覆土中から出土しているが、細片のため図化できるものはなく、ほとんど埋没時の流入と考えられる。

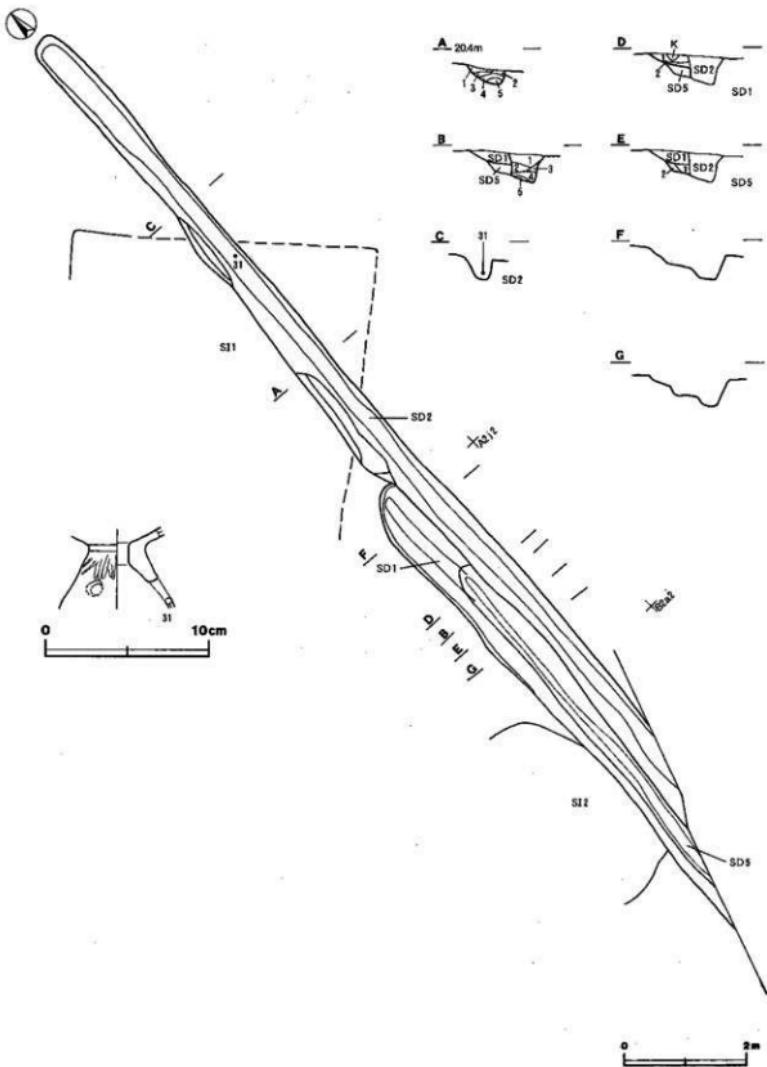
所見 時期は、伴出する遺物がないため不明である。

### 第2号溝 (第23図)

位置 調査区北東部のA 2 g1~B 2 a1区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 第1・5号溝の東側を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区の東部北寄りを北方向 (N-6°-E) へ直線的に延びている。確認された長さは16.8mほどで、南端はさらに南へ延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅0.4~0.8mで、深さは0.44mほどである。形状は底面が平坦で、壁はやや開いて立ち上がる箱築研状を呈している。底面のレベルは、北側が標高19.8m、南側が19.7mであり、北から南に向かって10cmほどの傾斜がみられる。



第23図 第1・2・5号溝・出土遺物実測図

**覆土** 5層からなる。層序は安定せずにロームブロックを主体としているため、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

1	黒褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ロームブロック多量
3	褐色	ローム粒子少量

4	黒褐色	ロームブロック微量
5	褐色	ロームブロック中量

**遺物出土状況** 繩文土器片2点、土師器片5点(坏1, 壺3, 器台1)、須恵器片1点(蓋1)、陶器2点、石2点が覆土中から出土している。31は北部A 2h1区の溝中央部の覆土中層より出土しているが、ほかの遺物とともに埋没時に流入したと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。

第2号溝出土遺物観察表(第23図)

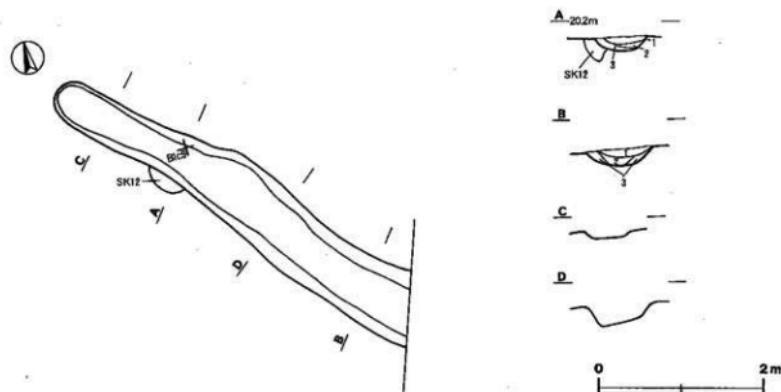
番号	種別	器種	口径	標高	底深	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
31	土師器	器台	一	(6.8)	一	長石・雲母	赤褐	普通	脚部外側へラブキ	覆土中層	30% 3孔穿孔

**第4号溝 (第24図)**

**位置** 調査区北東部のB 1b9~B 1c0区に位置し、標高20.0mの台地平坦部から東の斜面部に向かって立地している。

**重複関係** 第12号土坑の一部を、本跡が掘り込んでいる。

**規模と形状** 調査区の中心部より東西方向(N-41°W)に直線的に延びている。確認された長さは5.20mで、東端はさらに東へ延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅0.5~0.8m、深さは0.1~0.28mである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。底面のレベルは、北側が標高19.9m、南側が19.7mであり、北から南に向かって20cmほどの傾斜がみられる。



第24図 第4号溝実測図

覆土 3層からなる。層序はレンズ状を呈し、自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック微量
2	暗褐色	ロームブロック少量

3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片34点(壺1、甕33)、須恵器片6点(壺2、甕4)が覆土中から出土しているが、細片のため図化できるものではなく、ほとんどの遺物が埋没時の流入と考えられる。

所見 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。

第5号溝 (第23図)

位置 調査区北東部のA 2 ji～B 2 al区に位置し、標高21.0mの台地縁辺部に立地している。

重複関係 第2号溝に東側を、第1号溝に上部を掘り込まれている。

規模と形状 調査区の東部北寄りを北方向(N-6°-E)へ直線的に延びている。確認された長さは6.50mほどで、南端はさらに南へ延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅0.32～0.48mで、深さは0.16mほどである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、底面の傾きはほとんど認められない。

覆土 2層からなる。層序はレンズ状を呈し、自然堆積である。

土層解説

1 黄色 ロームブロック微量

2 棕褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片5点(甕5)が覆土中から出土しているが、細片のため図化できるものではなく、いずれも埋没時の流入と考えられる。

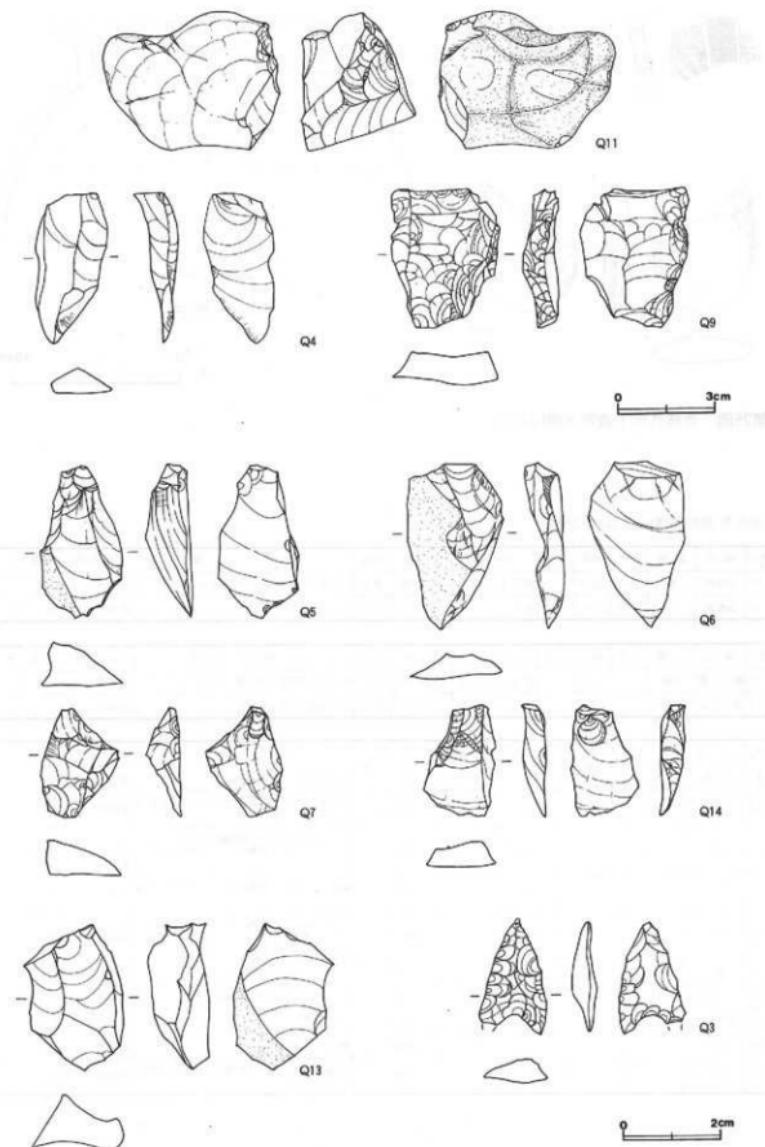
所見 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。

表16 溝一覧表

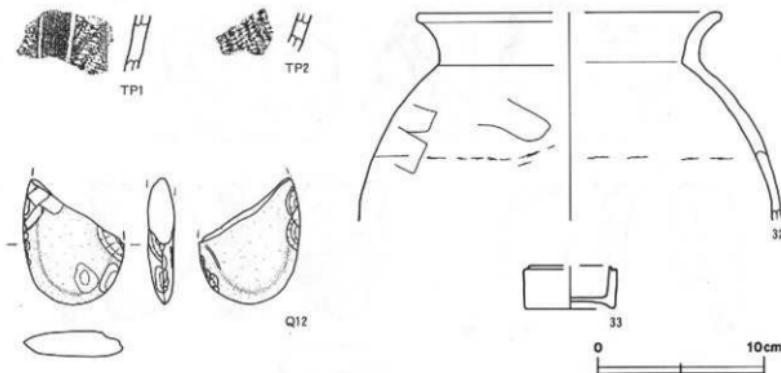
番号	位置	主軸方向	形状	規 模(m)				断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				確認長	上 幅	下 幅	深さ					
1	A 2 ii～B 2 bi	N-6°-E	直線	(5.50)	(0.4～0.8)	0.2	0.16～0.20	逆台形	平坦	自然		SII-SIII→本跡→SII
2	A 2 gl～B 2 al	N-6°-E	直線	(16.80)	0.4～0.8	0.2～0.4	0.44	箱型	平坦	人為	土師器	SII-SIII→本跡
4	B 1 b9～B 1 e0	N-47°-W	直線	(5.20)	0.5～0.8	0.32～0.6	0.1～0.28	逆台形	平坦	自然		SII2→本跡
5	A 2 ji～B 2 al	N-6°-E	直線	(6.50)	(0.32～0.48)	0.08～0.16	0.16	逆台形	平坦	自然		本跡→SII-SIII

(3) 造構外出土遺物

今回の調査で出土した、造構に伴わない遺物について、遺物観察表で記述する。



第25図 遺構外出土遺物実測図(1)



第26図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外遺物観察表(第25・26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
32	土師器	甕	[18.0]	(12.6)	—	雲母・長石・石英	にいり相	普通	口部削平、底面へ削り、輪様み板	遺構外	20%
33	須恵器	合子	[4.8]	2.6	5.4	長石	灰白	良好		遺構外	80% PL.9

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	繩文土器	深鉢	—	(3.3)	—	雲母・長石・石英	にいり相	普通	地刃回の半周横文、底面に縦に取り削す	遺構外	
TP2	繩文土器	深鉢	—	(2.2)	—	長石	灰白	普通	底の半周横文を傾かず施文	遺構外	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	石核	2.3	1.4	0.5	(0.7)	チャート	全表面打撲による入念な擦れ、欠損有り	遺構外	PL.10
Q4	剥片	4.6	2.2	1.4	7.3	珪質頁岩	縦長剥片を素材とし、半周削面打面、背面は自然面を多く残している。	遺構外	
Q5	剥片	3.1	1.7	0.9	3.1	硬質頁岩	厚手の粗粒剝片を素材とし、半周削面打面、背面は一部自然面を残しており、主要剥削面と同方向の側面が強めで削られていている。	遺構外	PL.10
Q6	剥片	3.4	1.9	0.8	3.0	珪質頁岩	粗粒剝片を素材とし、半周削面打面、背面は自然面を多く残している。	遺構外	PL.10
Q7	剥片	2.2	1.6	0.7	1.2	硬質頁岩	不定型な剝片、打面は磨理面を打面としている。背面は多角形から六角形が残されている。右側面の一帯に自然面を残す。左側面は擦り削面である。	遺構外	PL.10
Q9	剥片	4.3	3.3	1.1	14.5	珊瑚	縦長剥片を素材としている。	遺構外	PL.10
Q11	石核	4.3	5.4	3.5	63.1	珪質頁岩	礫を半脱した石核で、片面は全面磨削面を残す。	遺構外	
Q12	磨製石斧	(7.6)	6.0	1.7	(86.2)	安山岩	高浦太郎	遺構外	PL.10
Q13	剥片	3.0	2.1	1.3	6.0	硬質頁岩	縦長剥片を素材としている。	遺構外	PL.10
Q14	剥片	2.3	1.5	0.5	1.3	黒曜石	縦長剥片を素材とし、打面は半周磨削面で、背面は主要剥削面と少しがたね。	遺構外	PL.10

## 第4節 まとめ

当遺跡の調査は、平成14年4月から5月の2か月間で実施され、竪穴住居跡7軒、鍛冶工房跡1軒、古墳1基、土坑34基、溝4条が確認された。当遺跡は古墳時代後期から中・近世にかけての集落跡を中心とする複合遺跡であることが判明した。今回の調査だけでは当遺跡の全貌を把握するまでには至らないが、確認できたいいくつかの事柄を各時代ごとにまとめてみたい。

### 1 旧石器時代～弥生時代

旧石器時代においてはローム層を掘り下げてグリット調査を行ったが、遺構の発見や遺構に伴う遺物の検出には至らなかった。しかし、剥片を中心とした石器も10点近く見つかっているため、当遺跡周辺での活動の可能性は否定できない。同じく、縄文時代も住居跡やその他の遺構の検出は認められないが、土器や石器の出土が確認できた。その後の弥生時代になると様相は一変し、遺構・遺物の発見は見られなくなる。

### 2 古墳時代

竪穴住居跡2軒と、古墳1基が調査区北部に集中して検出され、2軒の竪穴住居跡はいずれも5世紀後半と考えられ、6世紀中葉と比定した第1号墳に掘り込まれている。ただし、2軒は輪線が異なるため、多少の時差も考えられる。第1号墳については直径16mほどの円墳と推定され、当遺跡の周辺に展開する島名関ノ台古墳群との関係を考える必要がある。島名関ノ台古墳群は、10m前後の円墳を主体とする古墳群であるが、第1号墳もその一支墳であると考えられる。

### 3 奈良・平安時代

竪穴住居跡5軒と鍛冶工房跡1軒が調査区中央部に集中して検出され、5軒の竪穴住居跡のうち、2軒は立て替えと考えられ、他の3軒も2軒とはほぼ同じ地点に建てられている。第3・4号住居跡からは三彩陶器片が出上している。特に托と考えられる三彩片は第3号住居跡の床面から出土しており、当住居跡に伴うことが注目される。鍛冶工房跡は9世紀中葉と考えられるが、多量の鐵滓や鍛造剥片などが検出され、鐵器生産の工房跡と考えられる。また、堆塙と思われる須恵器片が出土しているが、器内面には銅滓の付着が認められ、本跡周辺に銅の精錬施設の存在を窺わせている。工房跡の床面の上に、硬化した床面があり、上下2面の関係が判然とはしなかった。これらのことから、当時期の遺構より検出された遺物を概観すると、鉄鉢形土器や三彩陶器の破片、鐵器の生産や銅の精錬に係わる工房の存在などから仏教関係施設が近接していた可能性があると考えられる。

この時期、同じ台地上の南に広がる大規模集落である熊の山遺跡を見てみると、まず、7世紀の初め頃には鍛冶関連の手工業が始まっていたと考えられているが、明確な形での工房跡の検出は、当遺跡鍛冶工房跡とほぼ同時期である。また、10世紀頃には銅の鋳造が行われていた痕跡が認められるが、当遺跡の銅の精錬施設との関係については今後の調査研究が待たれる。仏教関係の遺物・遺構については、9世紀になって確認されており、土器類仏鉢形上器が9世紀後葉に検出し、10世紀になると、仏堂的な建物の検出が認められている。

### 4 中・近世

当遺跡からは、中世の遺構と明確に判断できるものは見つかってはいないが、近世の遺構も遺物を伴ってい

るわけではなく、その規模と形状から近世のイモ穴と推測したにすぎない。あるいは時期不明の土坑のいくつかは当時期のものとも考えられるが、明確な根拠が得られなかつた。また、第1・2・5号溝などは同時期の掘り返しの結果と考えられる。

以上が今回の島名闇ノ台南B遺跡の調査によって得られた事柄に考察を交えてまとめたものである。今後の課題としては、奈良・平安時代期の銅の精錬所や仏教関係施設の存在の検出もしくはそれの明確な裏付けと考えられる。

#### 参考文献

- ・福田義弘「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 熊の山遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告第190集』 平成14年3月
- ・青木仁昌「遺跡紹介 仏教関連遺物出土遺跡 つくば市島名熊の山遺跡」『研究ノート』11号 茨城県教育財团 平成14年6月

## 第4章 面野井北ノ前遺跡

### 第1節 遺跡の概要

面野井北ノ前遺跡は、古墳時代から中・近世にかけての墓域を中心の複合遺跡であることが確認できた。

今回の調査によって、古墳時代の古墳1基、中世の方形堅穴造構1基、近世の墓塚1基、時期不明の土坑22基、溝6条などが検出された。遺物は、土師器、須恵器を中心に遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に4箱出土している。

古墳時代の遺構は、後期の古墳が台地斜面部に築かれているが、西側半分しか調査区内にかからなかった。

中世の遺構は、方形堅穴造構1基が検出され、近世の遺構は、墓塚が1基確認された。

ほかには、時期不明の土坑が22基、溝が6条確認されている。

### 第2節 基本層序

テストピットは、調査区北端のA2d8区に掘削した。地表面の標高は22.8mで、地表面から深度2.5mまで掘削した。基本土層図を第29図に示した。

テストピットの土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから13層に細分される。これらは、大きく表土・関東ローム層・常総粘土層に分類され、第1層が表土(耕作土)、第2~11層が関東ローム層、そして第12~13層が常総粘土層に相当する。

各層の特徴を述べる。

第1層は、暗褐色を呈する腐植土層で、ロームブロックを少量含む。粘性・しまりはともに弱い。層厚は28~40cmである。表土(耕作土)である。

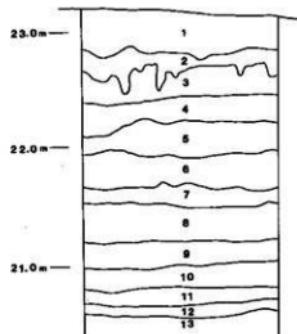
第2層は、褐色を呈するローム層で、炭化粒子を微量に含む。粘性は強く、しまりは普通である。層厚は6~40cmである。ソフトロームに相当すると考えられる。なお、第1黒色帯については確認することができなかつた。

第3層は、褐色を呈するローム層で、始良Tn火山灰(AT)を含む。粘性・しまりともに強い。層厚は8~30cmである。ハーデロームに相当すると考えられる。

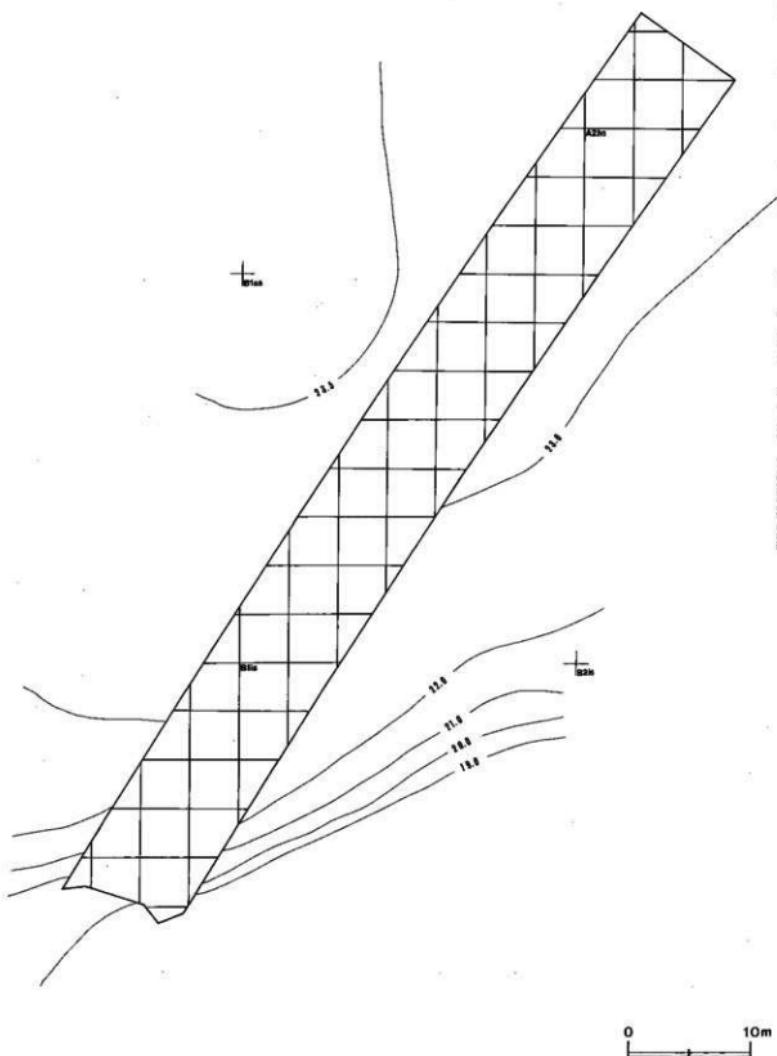
第4層は、暗褐色を呈するローム層で、粘性・しまりともに強い。層厚は16~30cmである。第2黒色帯に相当すると考えられる。

第5層は、明褐色を呈するローム層で、粘性は強く、しまりは普通である。層厚は12~30cmである。

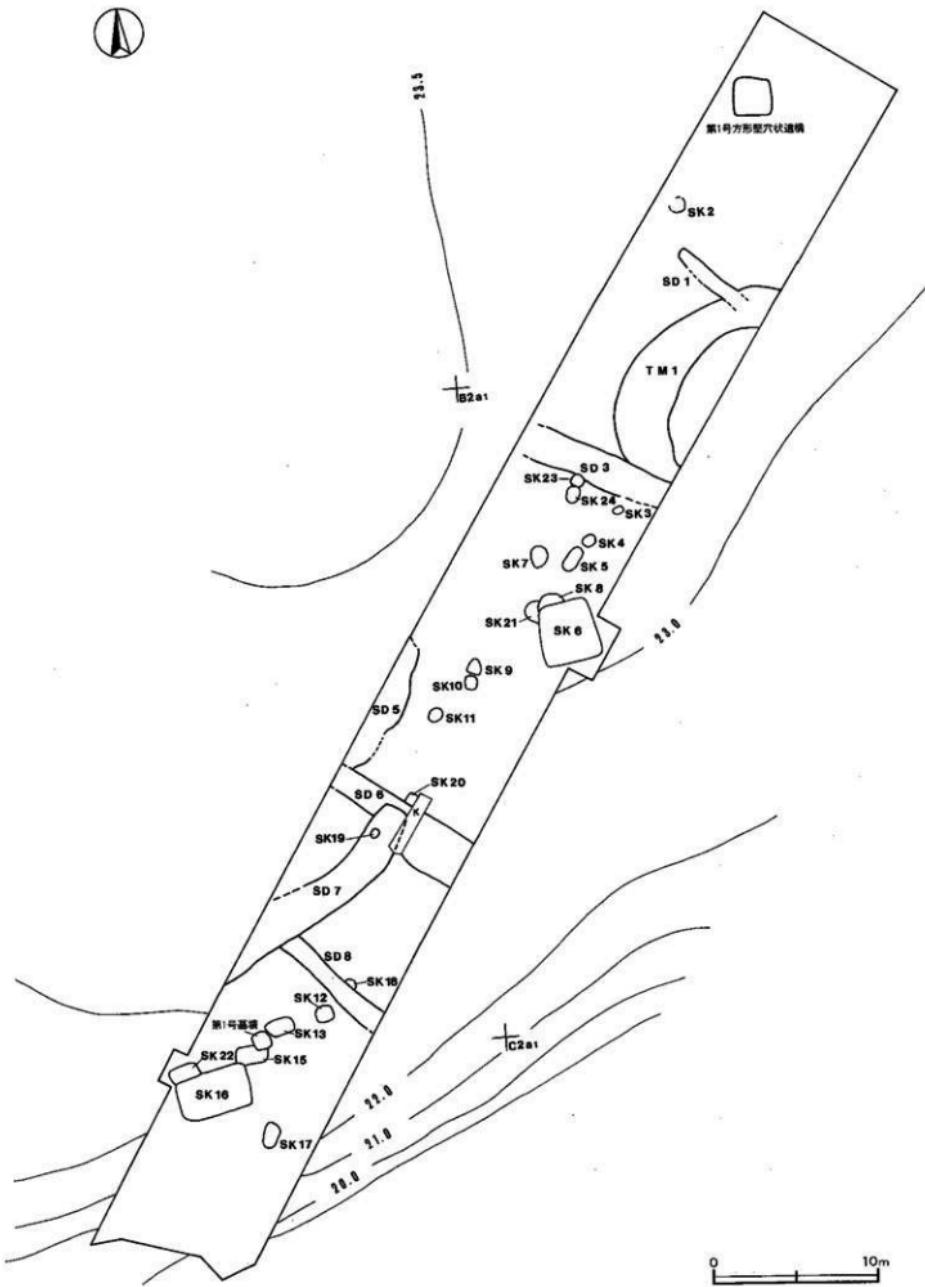
第6層は、明褐色を呈するローム層で、粘性・しまりともに強い。層厚は22~35cmである。



第29図 基本土層図



第27図 面野井北ノ前遺跡調査区設定図



第28図 面野井北ノ前遺跡遺構全体図

第7層は、明褐色を呈するローム層で、粘性・しまりともに強い。層厚は11~20cmである。

第8層は、橙色を呈するローム層で、粘性・しまりともに強い。層厚は30cmである。

第9層は、にぶい褐色を呈するローム層で、粘性・しまりともに強い。層厚は16~22cmである。

第10層は、にぶい褐色を呈するローム層で、粘性・しまりともに強い。層厚は17~22cmである。

第11層は、にぶい褐色を呈するローム層で、粘性・しまりともに強い。層厚は10~15cmである。

第12層は、浅黄褐色を呈する粘土層で、粘性・しまりともに強い。層厚は8~13cmである。常総粘土層の漸移層である。

第13層は、灰白色を呈する粘土層で、粘性・しまりともに強い。層厚は16cm以上で下層は未掘のため、本来の厚さは不明である。常総粘土層である。

住居跡・土坑等の遺構は、第2層上面で確認した。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、古墳時代の古墳1基を確認した。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

##### 古墳

###### 第1号墳 (第30図)

位置 調査区北東部のA2 j4区を中心に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

重複関係 周溝の北側を第1号構に、南側を第3号構にそれぞれ掘り込まれている。

墳形及び規模 検出された遺構の規模は、周溝内径が5mほどである。東側は調査区外のため詳細は不明であるが、円墳と推察される。

墳丘 削平を受けるが、若干残存する。埋葬施設は未確認である。

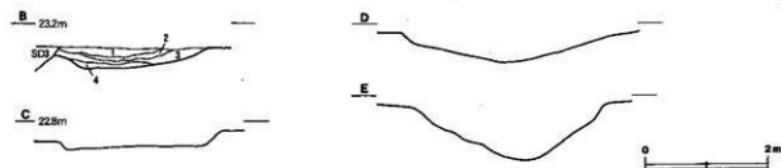
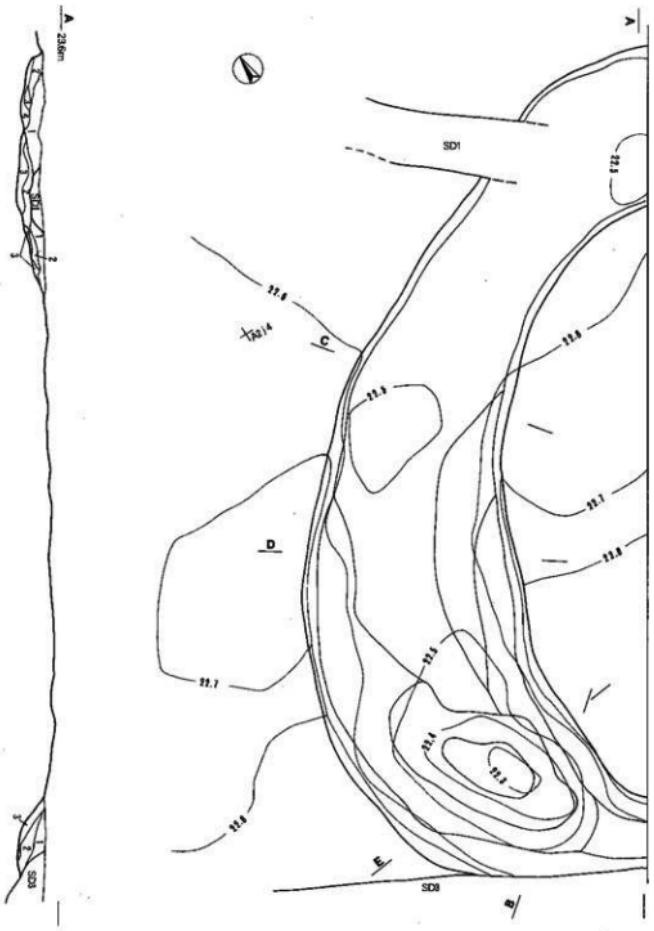
周溝 上幅2.3~3.6m、下幅1.8~2.7m、深さ25~90cmで、底面はほぼ平坦だが、南部に1か所他より20cmほど掘りくぼめたところがあるが、用途などについては不明である。また、壁は緩斜して立ち上がる。覆土は4層からなり、ローム粒子を主体とするレンズ状に近い堆積を示す自然堆積である。

##### 周溝土層解説

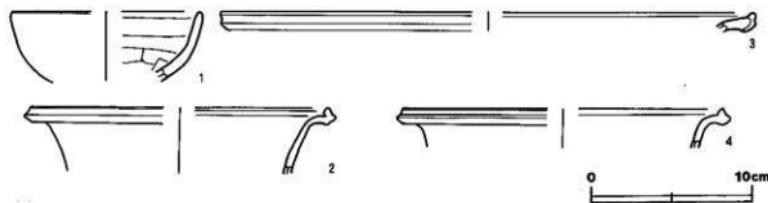
1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	3 黄褐色	ロームブロック中量
2 緑褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	4 黄色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片62点(坏1、甕61)、須恵器片23(甕23)が出土している。これらは上層から下層まで散乱した状態で検出されているが、そのほとんどは細片である。1~4は覆土中からの出土であり、位置などは不明である。

所見 本跡の時期は、出土土器からは不明である。



第30図 第1号墳実測図



第31図 第1号墳出土遺物実測図

第1号墳出土遺物観察表(第31図)

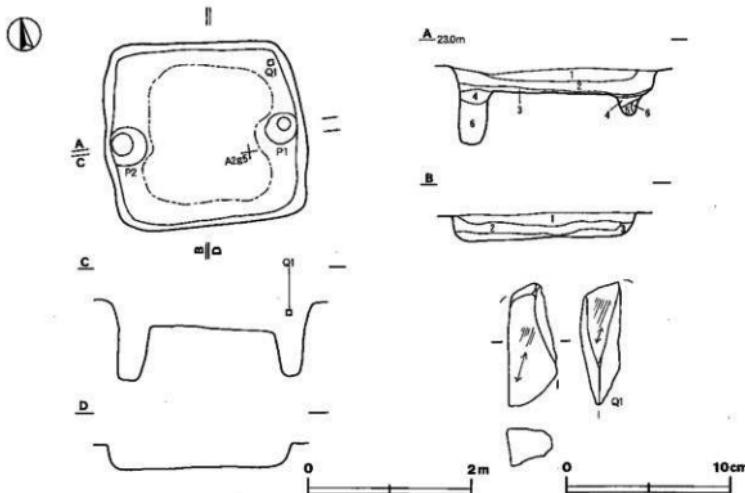
番号	種別	器種	口径	標高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	[11.8] (4.3)	—	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ、体部内面ヘラナデ	覆土中	10%	
2	須恵器	甕	[18.6] (4.1)	—	石英・長石	褐灰	普通	山襟部横ナデ	覆土中	5%	
3	須恵器	甕	[33.2] (1.1)	—	石英・長石・雲母	黒	良好	口縁部横ナデ	覆土中	5% PL18	
4	須恵器	甕	[20.0] (2.6)	—	長石・雲母	黄灰	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5% PL18	

## 2 中・近世の遺構と遺物

今回の調査で、中世の方形堅穴造構と、近世の土壤を各1基ずつ確認した。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

第1号方形堅穴造構(第32図)

位置 調査区北東部のA 2 f5区を中心に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。



第32図 第1号方形堅穴造構・出土遺物実測図

**規模と形状** 長軸2.46m、短軸2.24mのほぼ方形であり、深さは28~36cmである。長軸方向はN-85°-Wであり、壁は直立して立ち上がる。

**床** 平坦であり、中央部が強く踏み固められている。

**ピット** 2か所。P 1が深さ60cm、上場40cm、下場16cmほどの円形で、P 2が深さ69cm、上場44cm、下場24cmほどの円形をなす。それぞれ同様の形状とその配置から、主柱穴と考えられる。

**覆土** 6層に分けられる。ロームブロックを主体とし、焼土粒子や炭化粒子・炭化物の混入などから、人為堆積と考えられる。また、4・5・6層はピット内の覆土である。

**土層解説**

1	褐色	ロームブロック微量	4	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
2	褐暗褐色	炭化物少量、ロームブロック微量	5	褐色	ローム粒子微量
3	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	6	明褐色	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 石器1点(砥石1)が、北東部壁際の中層から出土しているのみである。

**所見** 時期は、出土遺物からは判断できないが、その形状から中世のものと考えられる。

第1号方形堅穴造構出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(7.5)	3.1	(2.4)	(68.8)	凝灰岩	2面使用、縁条痕あり、欠損	覆土中層	

**第1号墓壙** (第33図)

**位置** 調査区南部のB 1.j7区に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

**重複関係** 第15号土坑の北東部を掘り込んでいる。

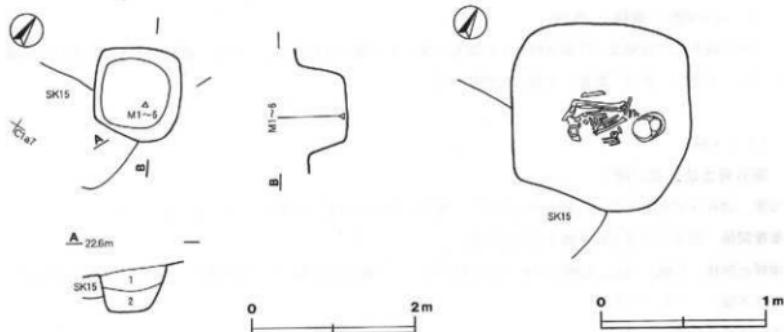
**規模と形状** 1辺1.1mの方形で、深さは58cmである。壁は外傾して立ち上がる。

**床** 平坦である。

**覆土** 2層に分けられる。ロームブロックを主体とした、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

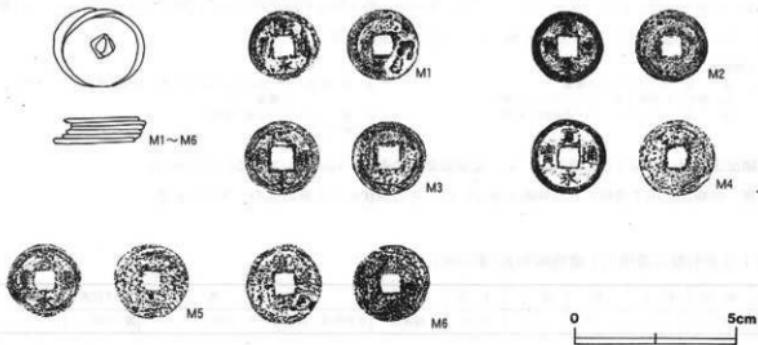
1	褐色	ロームブロック中量	2	褐色	ロームブロック多量
---	----	-----------	---	----	-----------



第33図 第1号墓壙実測図

**遺物出土状況** 人骨1体分と、人骨の手元付近より古銭が6枚重なった状態で床面から出土している。人骨は後頭部が北東に位置し、背骨が東から西に延び、大腿骨と上腕骨が背骨の手前にきており、座棺で埋葬され、体が横向きに倒れた状態で検出されたものと考えられる。ただし、棺は検出されていない。古銭は寛永通宝が主体である。

**所見** 本跡の時期は、寛永通宝の検出から18世紀以降と考えられる。



第34図 第1号墓壙出土遺物実測図

第1号墓壙出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	古銭	2.2	0.2	0.6	2.5	銅	寛永通宝	覆土下層	PL1B
M2	古銭	2.3	0.15	0.6	2.4	銅	寛永通宝	覆土下層	PL1B
M3	古銭	2.35	0.15	0.7	2.9	銅	寛永通宝	覆土下層	PL1B
M4	古銭	2.4	0.1	0.6	2.6	銅	寛永通宝	覆土下層	PL1B
M5	古銭	2.3	0.15	0.6	3.1	銅	寛永通宝	覆土下層	PL1B
M6	古銭	2.4	0.2	0.6	4.5	銅	寛永通宝	覆土下層	PL1B

### 3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期及び性格不明の土坑22基、溝6条が検出された。以下、遺物が出土した土坑と、溝について記述し、他は一覧表と実測図を掲載する。

#### (1) 土坑

##### 第6号土坑(第35図)

**位置** 調査区中央部東寄りのB2d2に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

**重複関係** 第8・21号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸3.75m、短軸3.39mの長方形を呈し、主軸方向はN-5°-Wである。深さは0.68~1.12mで、壁は外傾して立ち上がる。

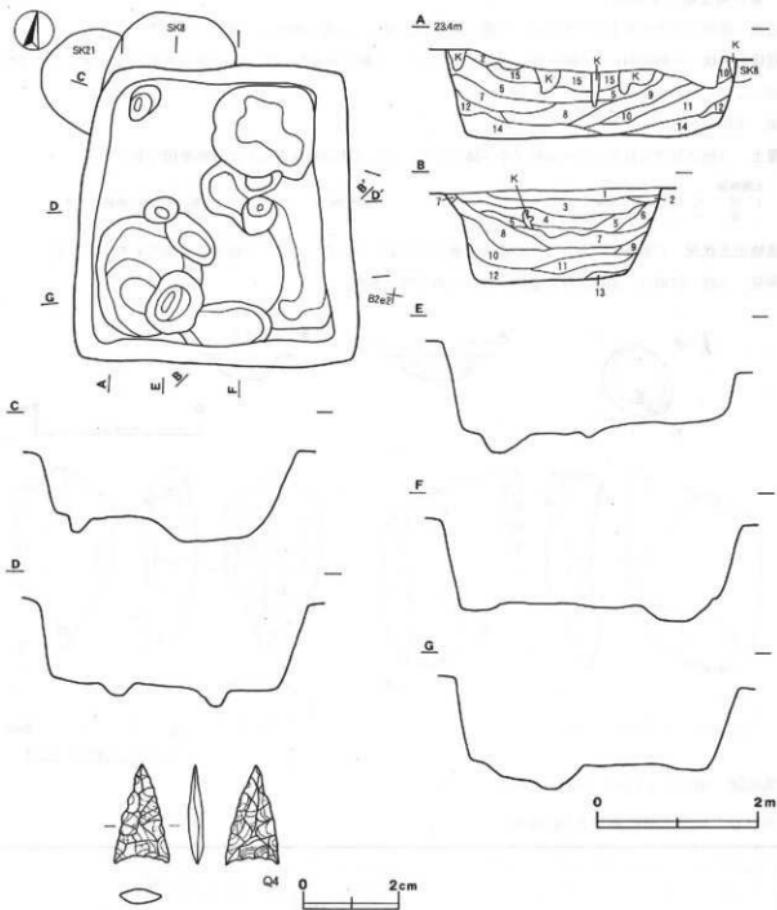
**床** 凸凹である

**覆土** 15層に分けられる。1層から4層まではローム粒子を主体とした、レンズ状の層序を示した自然堆積で

あり、5層からはロームブロックを主体とした、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・埴土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	11 暗褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子多量
5 黒褐色	ローム粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子中量、埴土粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子多量、埴土粒子微量
7 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	15 暗褐色	ローム粒子多量、埴土粒子・炭化粒子微量
8 黒褐色	ロームブロック中量、炭化物微量		



第35図 第6号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片2点(斐2)と石器1点(石礫1)が覆土中から出土している。Q4は他からの流入と考えられる。

所見 本跡の時期は、遺構に伴う遺物がないため不明である。

第6号土坑出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q4	石礫	2.1	1.1	0.3	0.4	黒曜石	表面粗面で、基部の抉りは浅く、側縁は直角	覆土中	PL18

### 第11号土坑(第36図)

位置 調査区中央部西寄りのB 1e0に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

規模と形状 長軸0.94m、短軸0.77mの楕円形を呈し、主軸方向はN-42°-Eである。深さは30cmで、壁は外傾して立ち上がる。

床 平坦である

覆土 3層に分けられる。ローム粒子を主体とした、レンズ状の層序を示した自然堆積である。

#### 土層解説

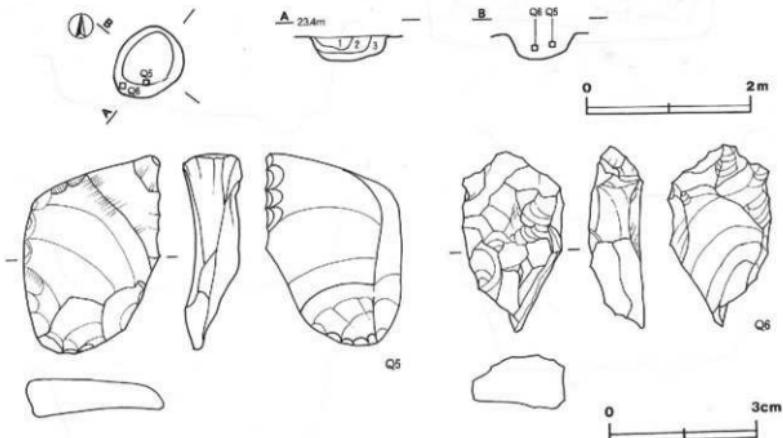
1 極 色 ローム粒子微量

2 極 色 ロームブロック微量

3 明 極 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 石器2点(剥片2)が覆土中層から出土している。これらは他からの流入と考えられる。

所見 本跡の時期は、遺構に伴う遺物がないため不明である。



第36図 第11号土坑・出土遺物実測図

第11号土坑出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q5	剥片	4.0	2.8	1.3	11.2	安山岩	縦長剥片を意味している。背面の一部に剥離面を残し、左側縁に自然面を残す。自然面打削面で、背面は多方向からの剥離が示されている。	覆土中	
Q6	剥片	3.7	2.1	1.1	8.6	ガラス質混色 安山岩	厚手の不定形剥片を意味とし、半剥離面打削面である。	覆土中	PL18

### 第16号土坑（第37図）

**位置** 調査区南部西寄りのC 1 a6に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

**重複関係** 第22・15号土坑との新旧関係は不明である。

**規模と形状** 長軸4.39m、短軸2.62mの長方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eである。深さは70cmで、壁は直立して立ち上がる。

**床** 平坦であるが、一部掘り込まれているところもある。

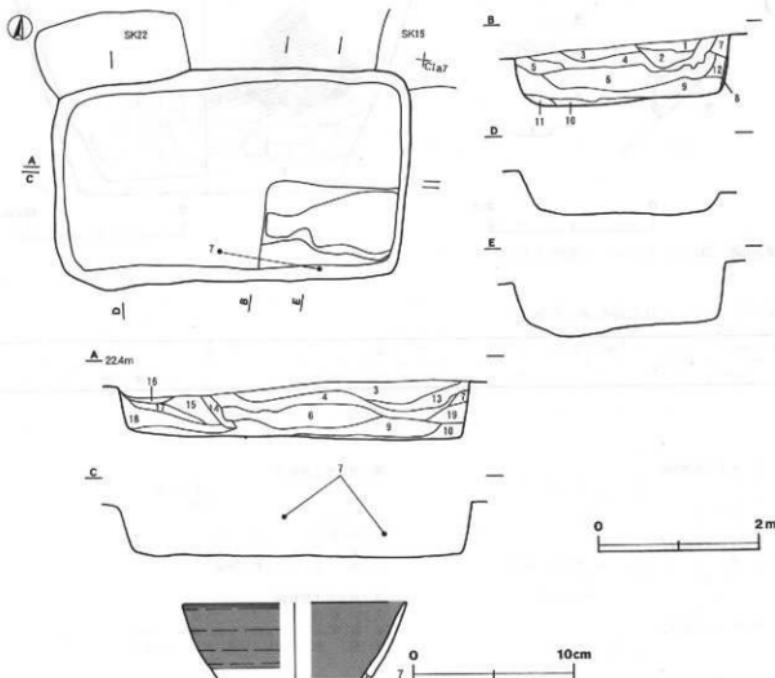
**覆土** 19層に分けられる。ロームブロックを主体とした、不安定な層序を示した人為堆積である。

#### 土層解説

1	褐色	ロームブロック微量	11	にじみ褐色	ロームブロック多量、縛まり強
2	褐色	ロームブロック少量、縛まり弱	12	にじみ褐色	ロームブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	13	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	14	暗褐色	ローム粒子微量、縛まり弱
5	暗褐色	ロームブロック・中量	15	褐色	ロームブロック中量、粘性強
6	褐色	ロームブロック・少量	16	褐色	ローム粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック・中量、炭化物微量	17	褐色	ロームブロック少量、粘性強
8	暗褐色	ロームブロック・少量、炭化粒子微量	18	褐色	ローム粒子微量、粘性強
9	褐色	ロームブロック・中量、縛まり強	19	暗褐色	ロームブロック・中量、炭化粒子微量、縛まり強
10	褐色	ロームブロック・少量			

**遺物出土状況** 陶器片1点（碗1）が覆土中層から出土している。これらは他からの流入と考えられる。

**所見** 本跡の時期は、遺構に伴う遺物がないため不明である。



第37図 第16号土坑・出土遺物実測図

第16号土坑出土遺物観察表(第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	陶器	釜	[14.0]	[5.0]	—	緻密	にふくわ	良好	体部内外面クロナダ	覆土中層	5%

第18号土坑(第38図)

位置 調査区南部西寄りのB 1 i8に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

重複関係 南側半分以上を第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸0.68m、短軸0.41mの橢円形を呈し、主軸方向はN-45°-Eである。深さは10cmで、壁は外傾して立ち上がる。

床 平坦である。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積から自然堆積と考えられる。

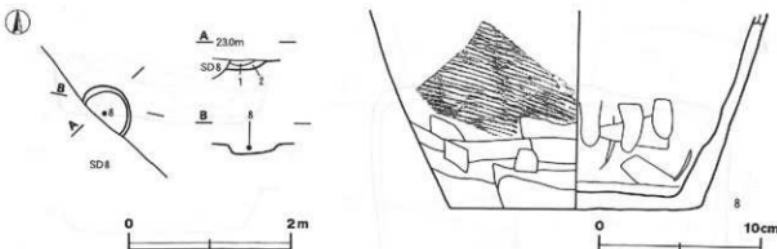
#### 土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 明褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 須恵器片1点(鉢1)が覆土中層から出土している。これらは他の流入と考えられる。

所見 本跡の時期は、遺構に伴う遺物がないため不明である。



第38図 第18号土坑・出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表(第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	須恵器	鉢	—	(5.0)	15.5	石英・長石・雲母	褐灰	普通	漆喰外壁中位焼き、下段ハラ削り、内面粗面質	覆土中層	30% PL18

#### 第2号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

#### 第3号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 にふくわ色 ロームブロック微量
- 3 明褐色 ロームブロック微量、縛まり強

#### 第4号土坑土層解説

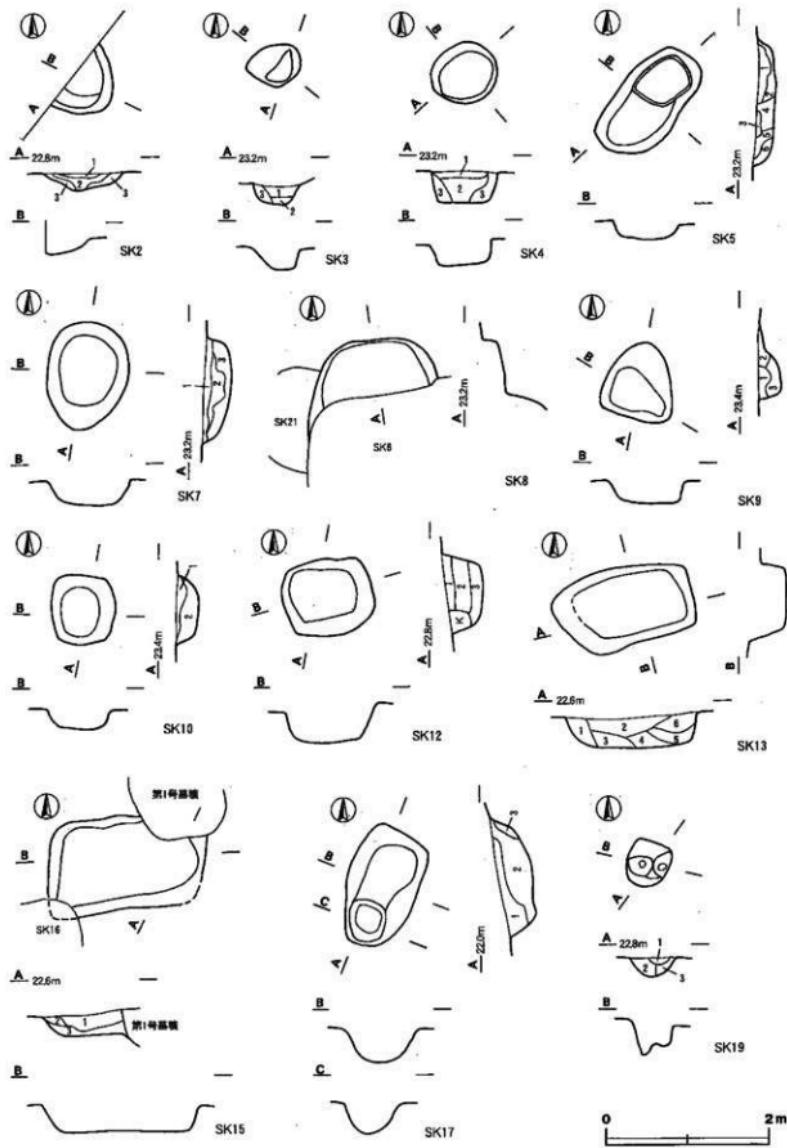
- 1 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 明褐色 ロームブロック微量

#### 第5号土坑土層解説

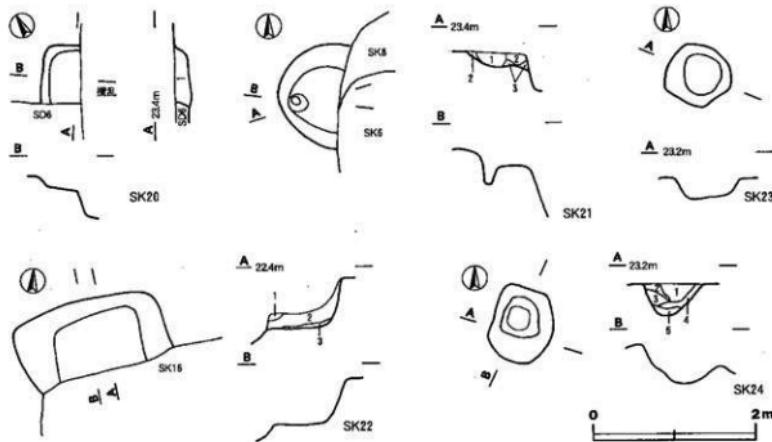
- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 にふくわ色 ロームブロック微量
- 4 明褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量

#### 第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量



第39図 土坑実測図(1)



第40図 土坑実測図(2)

第9号土坑土層解説

- 1 桃色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 明桃色 ロームブロック微量
- 3 暗桃色 ローム粒子微量

第10号土坑土層解説

- 1 桃色 ロームブロック微量
- 2 暗桃色 ロームブロック中量

第12号土坑土層解説

- 1 暗桃色 ローム粒子少量
- 2 暗桃色 ロームブロック少量
- 3 桃色 ローム粒子中量

第13号土坑土層解説

- 1 桃色 ロームブロック少量
- 2 暗桃色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗桃色 ロームブロック、焼土粒子微量
- 4 暗桃色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 5 桃色 ロームブロック微量
- 6 桃色 ローム粒子少量

第15号土坑土層解説

- 1 桃色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗桃色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

第17号土坑土層解説

- 1 桃色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 明桃色 ロームブロック少量
- 3 桃色 ローム粒子微量

第19号土坑土層解説

- 1 桃色 ロームブロック少量
- 2 暗桃色 ローム粒子少量
- 3 明桃色 ロームブロック中量

第20号土坑土層解説

- 1 暗桃色 ロームブロック・焼土粒子微量

第21号土坑土層解説

- 1 暗桃色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗桃色 ローム粒子微量
- 3 桃色 ロームブロック・炭化粒子微量

第22号土坑土層解説

- 1 暗桃色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 桃色 ロームブロック少量
- 3 暗桃色 ロームブロック中量

第24号土坑土層解説

- 1 暗桃色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 暗桃色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗桃色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗桃色 ロームブロック少量
- 5 桃色 ロームブロック中最

表1 土坑一覧表

土坑 番号	位 置 (長軸方向)	平面形	規 模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆上	出 土 遺 物	備 考 (目→新)
2	A2b4	N-39°-E	【椭円形】	0.96 × (0.57)	20	緩斜	平坦	自然	
3	B2c3	N-89°-E	椭円形	0.65 × 0.63	27	外傾	平坦	自然	
4	B2c2	N-50°-E	椭円形	0.81 × 0.73	30	外傾	平坦	自然	
5	B2c2	N-43°-E	椭円形	1.53 × 0.76	21	外傾	平坦	自然	
6	B2d2	N-5°-W	方形	3.75 × 3.39	69~112	外傾	凹凸	人為 自然	石織 SK21→SK8→本跡
7	B2c2	N-5°-E	椭円形	1.33 × 1.02	32	外傾	平坦	自然	
8	B2d2	N-81°-E	【圓丸方形】	1.55 × (0.68)	29	外傾	平坦	—	SK21→本跡→SK6
9	B1e0	N-10°-E	不整椭円形	0.93 × 0.90	29	外傾	平坦	人為	
10	B1e0	N-1°-E	椭円形	0.88 × 0.80	25	外傾	平坦	自然	
11	B1e0	N-42°-E	椭円形	0.94 × 0.77	30	外傾	平坦	自然	剥片
12	B1j8	N-77°-E	圓丸方形	1.10 × 0.96	42	外傾	平坦	自然	
13	B1j7	N-77°-E	圓丸異形	1.70 × 0.98	42	外傾	平坦	人為	
15	B1j7	N-87°-E	圓丸異形	1.94 × 1.14	30	緩斜	平坦	人為	本跡→第1号墓塙
16	C1a6	N-80°-E	長方形	4.39 × 2.62	70	直立	平坦	人為	陶器
17	C1b7	N-25°-E	椭円形	1.46 × 0.91	25~36	外傾	平坦	自然	
18	B1i8	N-45°-E	【椭円形】	0.68 × (0.41)	10	外傾	平坦	自然	須恵器
19	B1g9	—	円形	0.60 × 0.60	36~42	外傾	凹凸	人為	
20	B1g9	N-35°-E	【長方形】	(0.74) × (0.48)	18	外傾	平坦	自然	本跡→SK6
21	B2d1	N-0°	【椭円形】	1.30 × (0.78)	19	緩斜	平坦	人為	本跡→SK3→SK6
22	C1a6	N-75°-E	【長方形】	1.93 × (0.06)	58	外傾	平坦	自然	
23	B2b2	N-68°-W	不整円形	0.82 × 0.75	26	外傾	平坦	—	
24	B2b2	N-13°-E	不整椭円形	0.92 × 0.75	48	外傾	皿状	人為	

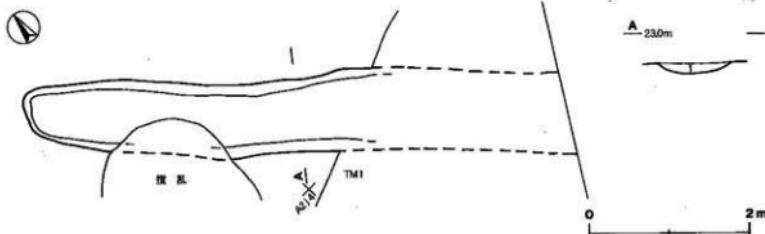
## (2) 溝跡

## 第1号溝（第41図）

位置 調査区北部のA 2 i4～A 2 i5区に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

重複関係 第1号塙を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区の北部の中心より東方向(N-44°-W)に向かって直線的に延びている。確認された長さは10.2mで、東端はさらに東へ延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅0.74～0.98m、下幅0.5～0.74m、深さ0.10mである。形状は底面が平坦で、壁は緩斜して立ち上がる皿状を呈している。底面の傾きはほとんど認められない。



第41図 第1号溝実測図

**覆土** 1層からなる。含有物はローム粒子、炭化物を主体とした、人為堆積である。

**土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少

**遺物出土状況** 土師器片3点(図3)が覆土中より出土しているが、固化できるものはない。多くの遺物が埋没時の流入と考えられる。

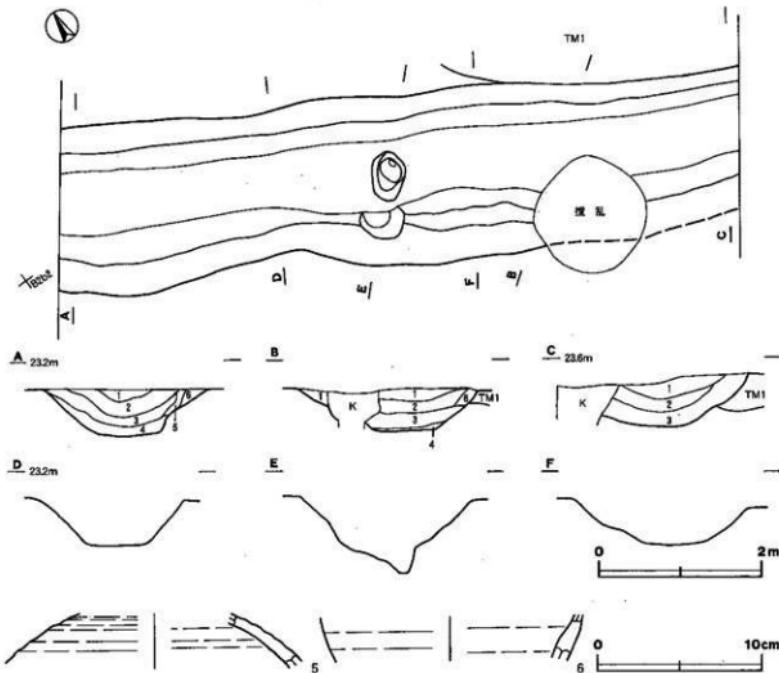
**所見** 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。

**第3号溝 (第42図)**

**位置** 調査区中央部のB 2 a2～B 2 b4区に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

**重複関係** 第1号墳の周溝を掘り込んでいる。

**規模と形状** 調査区の中央部を東から西方向(N-61°W)に向かって直線的に横切っている。確認された長さは8.40mで、東西両端はさらに延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅0.84～2.14m、下幅0.66～0.88m、深さ0.54～0.58mである。形状は底面が平坦で、壁は外傾して立ち上がる逆台形状を呈している。底面の傾きはほとんど認められない。



第42図 第3号溝・出土遺物実測図

覆土 6層からなる。堆積した覆土の層序はレンズ状を呈し、含有物はローム粒子を主体とした、自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量、粘性弱	4	黒褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5	褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6	黒褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片4点(甕4), 須恵器片15点(甕1, 壺14), 陶器片1点が覆土中より出土しているが、その多くは細片のため図化できるものがない。5の須恵器甕や6の灰釉陶器などの多くの遺物が埋没時の流入と考えられる。

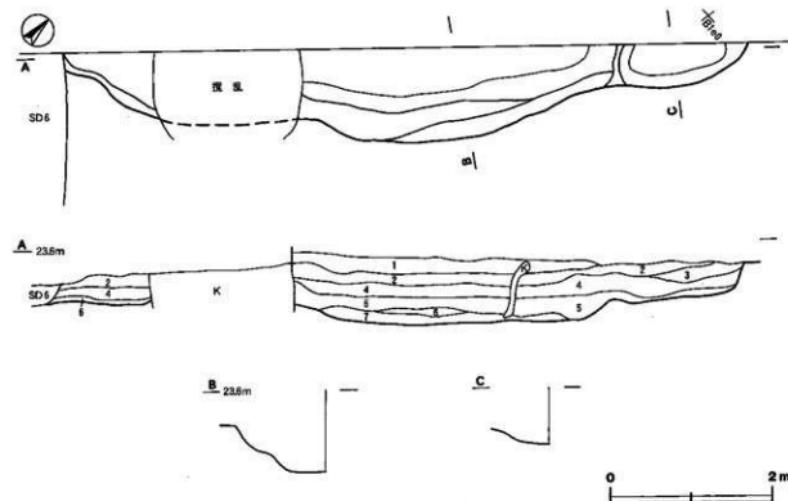
所見 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。

第3号溝出土遺物観察表(第42図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	須恵器	甕	—	(3.5)	—	長石	明褐色	良好	体部内外面クロナデ	覆土中	5%
6	灰釉陶器	甕	—	(2.8)	—	微密	にぶい黄	普通	体部内外面クロナデ	覆土中	5%

第5号溝(第43図)

位置 調査区中央部西寄りのB 1 d0~B 1 f8区に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。



第43図 第5号溝実測図

**重複関係** 第6号溝に南側の一部を掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区の中央部西寄りを掠めるように北から南方（N-36°-E）に向かってやや直線的に入り込んでくる。確認された長さは8.56mで、南北両端はさらには延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は調査区内の現状で、上幅1.14～0.24m、下幅0.22～0.62m、深さ0.18～0.68mである。形状は底面が平坦で、壁は外傾して立ち上がる逆台形状を呈している。底面の傾きはほとんど認められない。

**覆土** 7層からなる。堆積した覆土の層序はレンズ状を呈し、含有物はローム粒子を主体とした、自然堆積である。

**土層解説**

- |   |    |    |                |
|---|----|----|----------------|
| 1 | 褐  | 色  | ローム粒子・炭化粒子少量   |
| 2 | 黒  | 褐色 | ローム粒子少數、炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | 褐色 | ローム粒子微量        |
| 4 | 黒  | 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量   |

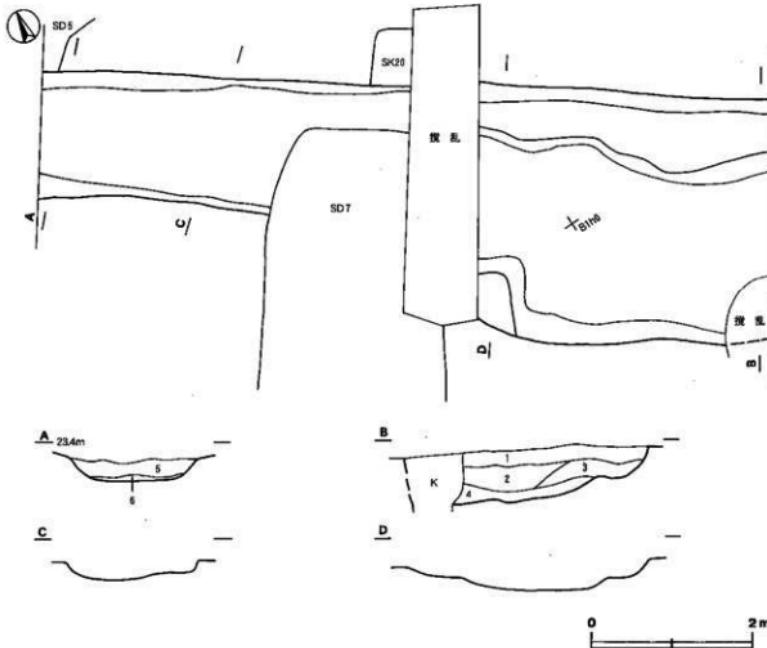
- |   |   |    |                |
|---|---|----|----------------|
| 5 | 暗 | 褐色 | ロームブロック微量      |
| 6 | 褐 | 褐色 | ロームブロック少量      |
| 7 | 褐 | 褐色 | ロームブロック少量、紺まり強 |

**遺物出土状況** 土師器片1点（斐1）のみが覆土中より出土しているが、細片のため図化できるものではなく、埋没時の流入と考えられる。

**所見** 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。

**第6号溝（第44図）**

**位置** 調査区中央部のB 1 f8～B 1 h0区に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。



第44図 第6号溝実測図

**重複関係** 第5号溝・第20号土坑を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区の中央部を東から西方向（N-50°-W）に向かって直線的に横切っている。確認された長さは9.10mで、東西両端はさらに延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅1.58~3.22m、下幅1.20~2.22m、深さ0.14~0.64mである。形状は底面が平坦で、壁は緩斜して立ち上がる皿状を呈している。底面の傾きは、西側が標高22.9m、東側が標高22.6mで、西から東に向かって30cmほどの傾斜がみられる。

**覆土** 6層からなる。堆積した覆土の層序はレンズ状を呈し、含有物はローム粒子を主体とした、自然堆積である。

**土層解説**

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	4	褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	ロームブロック少量	5	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、縁まり強	6	褐色	ローム粒子中量

**遺物出土状況** 須恵器片2点（高台付坏1、壺1）のみが覆土中より出土しているが、細片のため固化できない。これらは埋没時の流入と考えられる。

**所見** 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。

**第7号溝（第45図）**

**位置** 調査区南部のB 1 g9~B 1 i6区に位置し、標高22.0mの台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 第6・8号溝を掘り込んでおり、北東部と南西部の一部を後世の擾乱により掘り込まれている。また、第19号土坑との関係は不明である。

**規模と形状** 調査区南部の西際より北東方向（N-57°-E）に向かって直線的に延びている。これは標高23.0mの台地縁辺部を沿うようにして走り、北端部は立ち上がっている。確認された長さは13.00mで、西端はさらに延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅2.10~2.40m、下幅1.10~1.81m、深さ0.35mである。形状は底面が平坦で、壁は緩斜して立ち上がる皿状を呈している。底面の傾きはほとんど認められない。

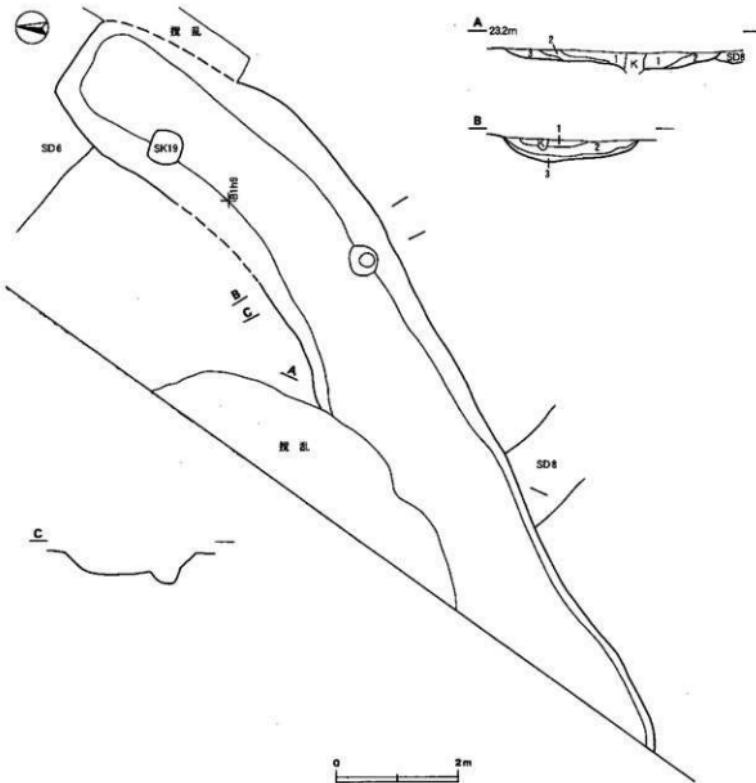
**覆土** 3層からなる。堆積した覆土の層序はレンズ状を呈し、含有物はローム粒子を主体とした、自然堆積である。

**土層解説**

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	3	褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			

**遺物出土状況** 須恵器片1点（壺1）のみが覆土中より出土しているが、細片のため固化することができない。これらは埋没時に流入したものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明であるが、第5号溝との形状や、軸線の角度の類似性などから各々の時期の前後はともかく互いを意識してつくられたものとも考えられる。また、北端部の立ち上がりから、雨水などの流路とは考えづらく、土地の区画を目的としたものと考えられる。



第45図 第7号溝(第9図)

#### 第8号溝 (第46図)

**位置** 調査区南部のB 1 i7～B 1 j9区に位置し、標高22.0mの台地平坦部に立地している。

**重複関係** 第18号土坑を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区の南部を東から西方向(N-41°-W)に向かって直線的に横切っている。確認された長さは7.02mで、東西両端はさらに延びるものと考えられるが、調査区外のため確認できなかった。規模は上幅1.01～1.50m、下幅0.53～0.88m、深さ0.10～0.40mである。形状は底面が平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。底面の傾きは、西側が標高22.6m、東側が標高22.3mで、西から東に向かって30cmほどの傾斜がみられる。

**覆土** 6層からなる。堆積した覆土の層序はレンズ状を呈し、含有物はローム粒子を主体とした、自然堆積である。

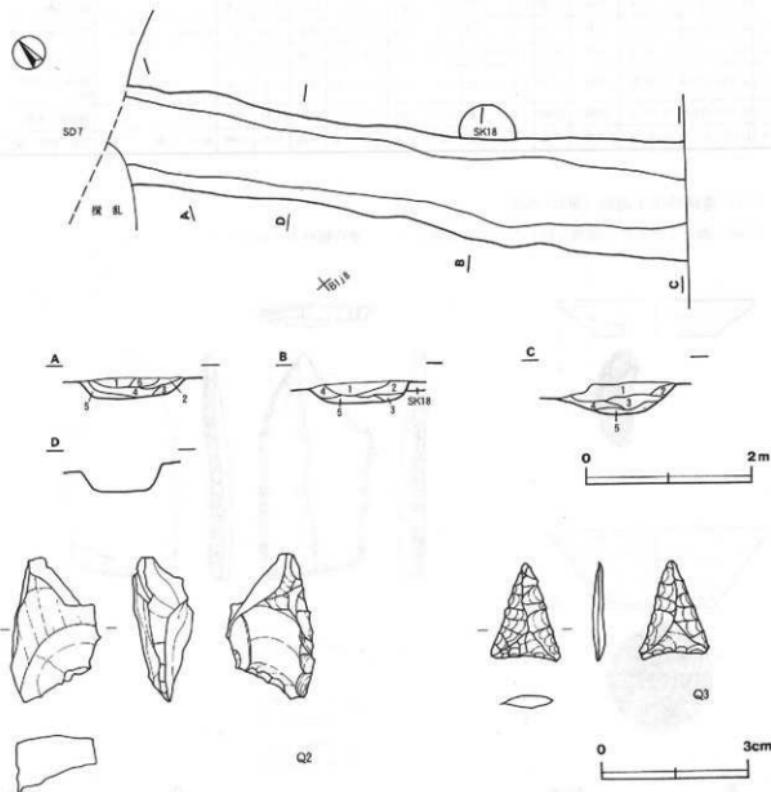
## 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・壤土粒子微量  
 2 黒色 ロームブロック・炭化物微量  
 3 明褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

- 4 黄褐色 塗土粒子・炭化粒子微量  
 5 明褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量  
 6 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片7点(甕7), 須恵器片13点(甕13), 石器2点(剥片1, 石鎌1)が覆土中より出土しているが、土器は細片のため図化できない。Q2の剥片, Q3の石鎌は他の土器と同様、埋没時の流入と考えられる。

所見 本跡の時期は、伴出する遺物がないため不明である。



第46図 第8号溝・出土遺物実測図

第8号溝出土遺物観察表(第46図)

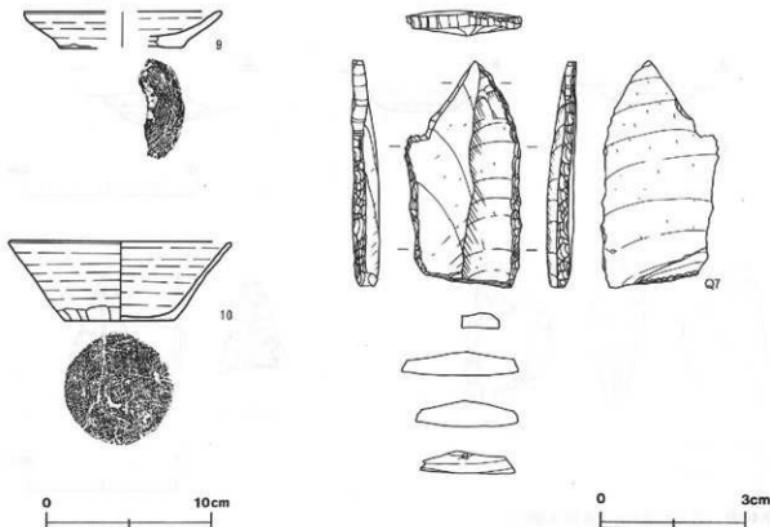
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q2	剥片	2.9	1.8	1.2	4.7	ガラス質墨色 安山岩	墨子の不定形剥片を素材としている。調整により片面 を磨り替えている。	覆土中	
Q3	石鏃	2.0	1.4	0.25	0.5	黒雲母 角閃石斜長岩	両面押付打撲面で、基部の抉りは浅く、側縁は直角 覆土中	PL18	

表2 溝一覧表

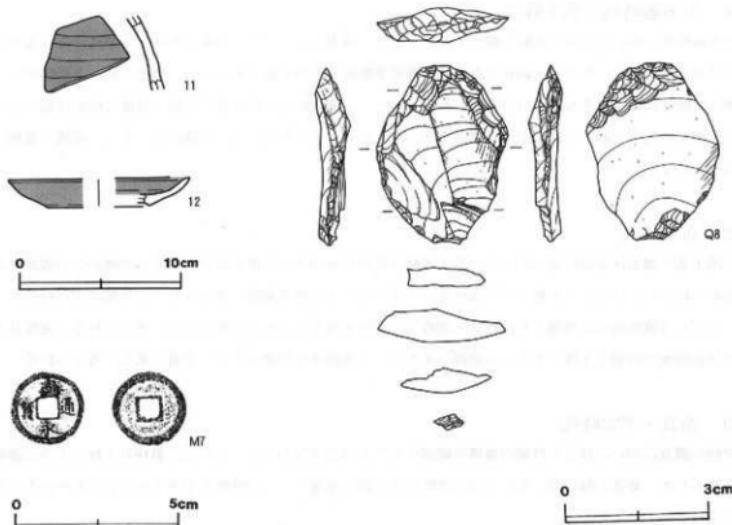
遺構 番号	位 置	主軸方向	形 状	規 模(m)				断面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 (旧→新)
				確認長	上 幅	下 幅	深 さ					
1	A214～A215	N-44°W	直溝	(10.20)	0.74 ~ 0.98	0.50 ~ 0.74	0.10	緩斜	平坦	人為		TM→本跡
3	B2a2～B2b4	N-61°W	直溝	(8.40)	1.84 ~ 2.14	0.66 ~ 0.88	0.54~0.58	外傾	平坦	自然	須恵器、灰陶胸器	TM→本跡
5	B1d1～B1f8	N-36°E	曲溝	(8.50)	(1.14)~(0.24)	(0.22)~(0.62)	0.18~0.68	外傾	平坦	自然		本跡→SD6
6	B1f8～B1h6	N-90°W	直溝	(9.10)	1.58 ~ 3.22	1.20 ~ 2.22	0.14~0.64	緩斜	平坦	自然		SD5-SD2→本跡→SD7
7	B1g9～B1i6	N-57°E	直溝	(13.00)	2.10 ~ 2.40	1.10 ~ 1.81	0.35	緩斜	平坦	自然		SD6-SD9→本跡
8	B1j7～B1j6	N-41°W	直溝	(7.02)	1.01 ~ 1.50	0.53 ~ 0.88	0.10~0.40	外傾	平坦	自然	剥片、石鏃	SK15→本跡→SD7

## (3) 遺構外出土遺物 (第47・48図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない主な遺物について遺物観察表で記述する。



第47図 遺構外出土遺物実測図(1)



第48図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第47・48図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	土師質土器	小瓶	[12.0]	2.2	[7.6]	石英・長石	浅黄褐	普通	口縁部模ナデ	遺構外	25%
10	須恵器	环	13.4	4.9	6.8	石英・長石・雲母	灰黄	普通	口縁部模ナデ、体部外下面へラ削り	遺構外	60% PLB
11	須恵器	壺	—	(4.7)	—	石英・長石	灰オリーブ	良好	口縁部模ナデ	遺構外	5% 外面輪削着
12	陶器	小瓶	[11.2]	1.8	[6.4]	織密	淡黄	普通	底部切り出し臺	遺構外	5% PLB 全面施釉

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q7	鄭器	4.6	2.3	0.5	6.3	硬質頁岩	範先剥片を素材とし、刃刀面は先端部から左肩にかけて作出される	遺構外	PLB
Q8	鄭器	3.7	2.7	0.7	6.2	硬質頁岩	範先剥片を素材とし、刃刀面は先端部から左肩にかけて作出される	遺構外	PLB

番号	種別	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	古錢	2.3	0.1	0.7	2.5	銅	寛永通宝	遺構外	

#### 第4節 まとめ

当遺跡の調査は、平成14年6月3日から6月30日の1ヶ月間で実施され、古墳1基、方形整穴遺構1基、墓壙1基、土坑22基、溝6条が確認された。当遺跡は古墳時代から中・近世にかけての墓域を中心とする複合遺跡であることが判明した。今回の調査のみでは当遺跡の全貌を把握するまでは至らないが、確認できたいいくつかの事柄を各時代ごとにまとめてみたいと思う。

## 1 旧石器時代～弥生時代

旧石器時代においてはローム層を掘り下げたグリット調査も行ったが、遺構の発見や、遺構に伴う遺物の検出には至らなかった。ただし、剥片3点の他に荒屋型彫器2点の石器も見つかっているため、当遺跡周辺での活動の可能性は否定できないものと考えられる。同じく、縄文時代も住居跡その他の遺構の検出は認められないが、縄文時代の土器や石器の出土は確認できる。ただし、弥生時代になると様相は一変し、遺構・遺物の発見はみられなくなる。

## 2 古墳時代

古墳1基が調査区北部に見つかっている。本跡は直径15mほどの円墳と推定される。周溝からの遺物の検出は認められるが、ほとんどが他からの流れ込みと見られ、また埋葬施設も発見されず、時期決定の材料が乏しい。ただし当遺跡周辺に展開する面野井古墳群との関係も考慮に入れる必要があると考えられる。面野井古墳群は10m前後の円墳を主体とする、古墳群であるが、当遺跡第1号墳もその一支墳であると考えられる。

## 3 奈良・平安時代

今回の調査においてはこの時期の遺構を確認することはできなかった。ただし、第18号土坑のように遺物は存在するため、集落の縁辺部、もしくは古墳時代より続く墓域としての性格を引きずっていたおそれもあると考えられる。

## 4 中・近世

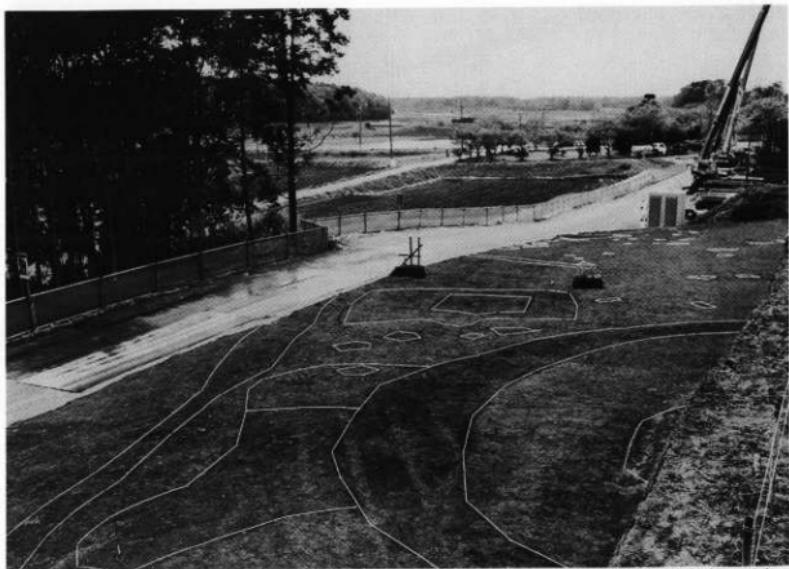
中世においては、方形堅穴遺構1基が調査区北部から確認されている。遺物も乏しく、その機能や性格については不明であるが、一般的に比較の対象となっているいくつかの項目について見ていくたいと思う。まず出入り口施設であるが、本跡においては確認することができなかった。次に柱穴であるが、本跡では2本確認された。炉状施設は発見されず、床面には硬化した面が確認された。以上のことから、それなりの期間は使用しているが、常駐しない臨時の、もしくは一定期間のみ使用する建物であったと考えられる。

近世においては、墓壙1基が調査区南部から確認されている。古銭6枚が文字面を上にして重ねて添えられていた。古銭は全て寛永通宝であり、18世紀以降の墓壙と考えられるが、本跡1基のみとは考えにくく、調査区外に墓域の広がりがあるものと考えられる。また、第6・16号土坑のような大型土坑は当時期の室状施設とも考えられ、時期の明確でない構も当時期の土地を区画するものとも考えられる。

以上が、今回の面野井北ノ前遺跡の調査によって得られた事柄である。今後の課題としては、第1号墳の全像の把握や、各遺構の広がりの確認とともに、近隣遺跡である面野井古墳群や面野井南遺跡と第1号墳との関係、面野井城と方形堅穴遺構との関係などを考える必要がある。

# 写 真 図 版

島名関ノ台南B遺跡

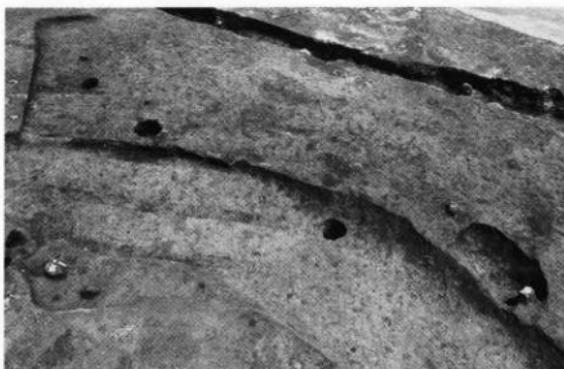


遺構確認状況（北から）



遺構完掘状況（南から）

PL 2



第1号住居跡  
遺物出土状況



第2号住居跡  
完掘状況



第3号住居跡  
完掘状況



第3号住居跡  
遺物出土状況



第3号住居跡  
完掘状況



第3号住居跡  
遺物出土状況



第4号住居跡  
完掘状況



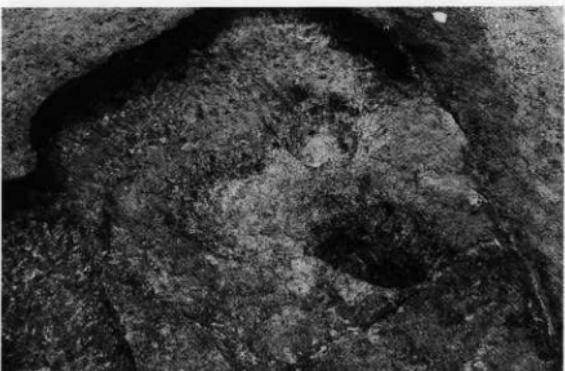
第4号住居跡  
遺物出土状況



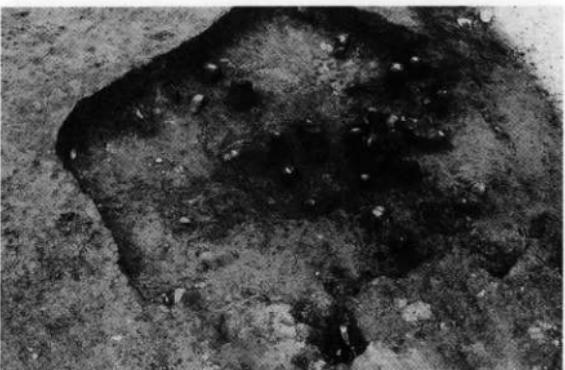
第4号住居跡  
遺物出土状況



第7号住居跡  
完 挖 状 況



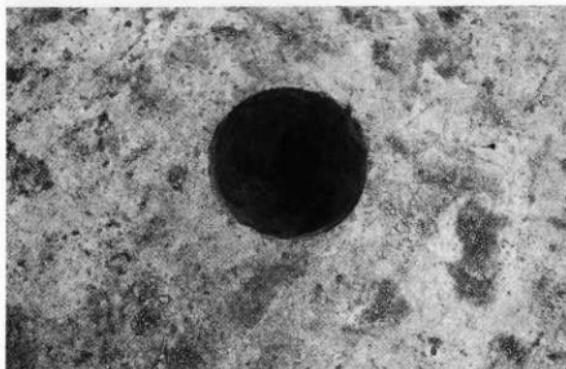
第1号鍛冶工房跡  
完 挖 状 況



第1号鍛冶工房跡  
遺 物 出 土 状 況



第1号鐵冶工房跡爐  
遺物出土狀況



第3号土坑  
完掘狀況



第8号土坑  
遺物出土狀況



第1号填埋物出土状况



第1·2·5号沟完掘状况



第33号土坑完掘状况



第30号土坑完掘状况

PL 8



SI 4-11



SI 4-12



SI 4-13



SI 4-14



SI 4-15



SI 4-16



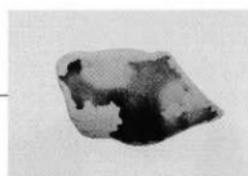
SI 3-8



第 1 号冶工房跡-26



SI 3-7



SI 3-9



SI 4-21



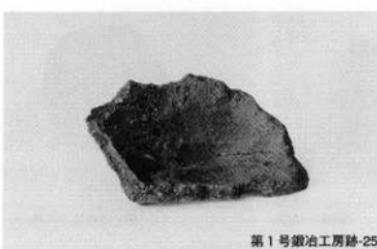
造構外-33



SI 4-18



SI 4-19



第1号鍛冶工房跡-25



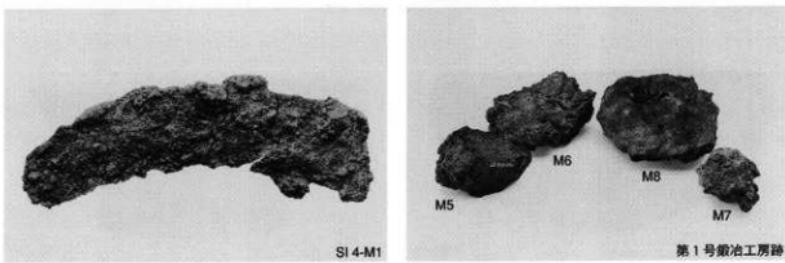
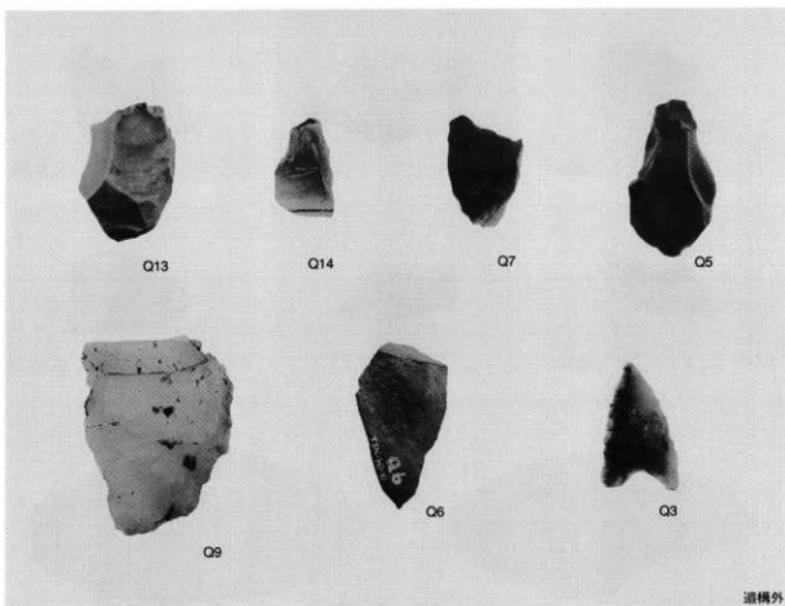
SI 4-20



TM I-30



SI 4-17



# 写 真 図 版

面野井北ノ前遺跡



遺構完掘状況（北から）



遺構完掘状況（南から）

PL12



基本土層断面



第1号墳  
完掘状況



第1号方形堅穴遺構  
遺物出土状況



第1号墓  
人骨挖出状况



第5号土坑  
完掘状况



第16号土坑  
完掘状况

PL14



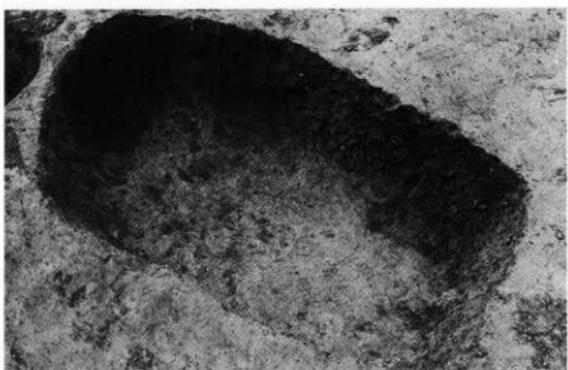
第6号土坑  
完掘状況（東から）



第6号土坑  
完掘状況（西から）



第12号土坑  
完掘状況



第13号土坑  
完掘状況



第1号墓壙・第15・16号土坑  
完掘状況（東から）



第17号土坑  
完掘状況

PL16



第18号土坑  
遗物出土状况



第3号沟  
完掘状况



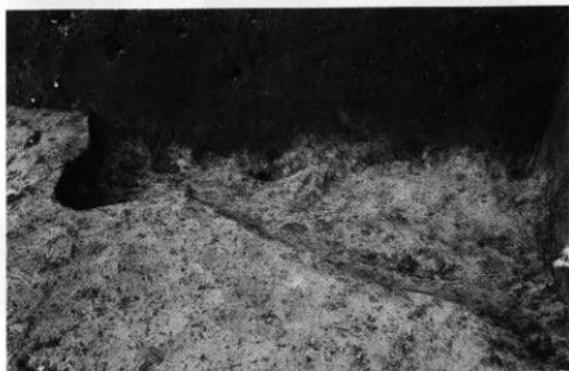
第5号沟  
完掘状况



第6・7号溝  
遺物出土状況①

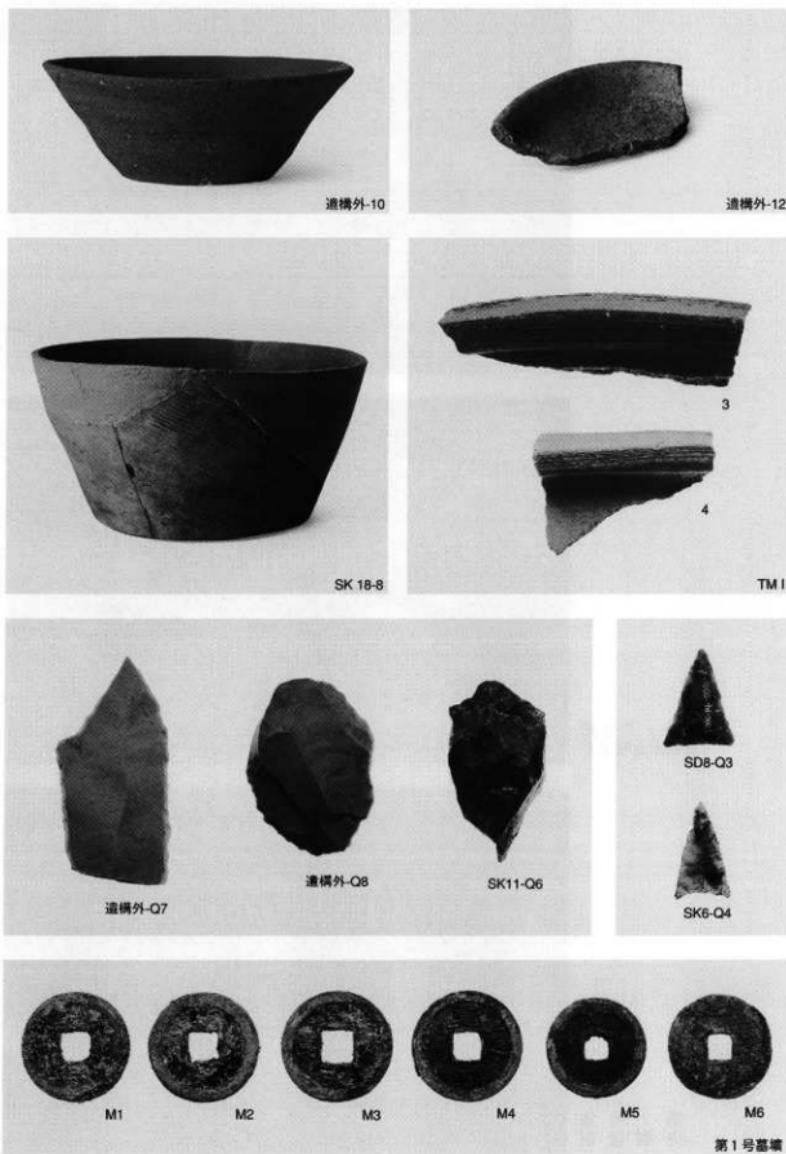


第6・7号溝  
遺物出土状況②



第7号溝  
完掘状況

PL18



茨城県教育財團文化財調査報告第231集

**島名閣ノ台南日遺跡  
面野井北ノ前遺跡**

平成16(2004)年3月24日印刷

平成16(2004)年3月26日発行

発行 財団法人 茨城県教育財團  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社  
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33  
TEL 029-252-8481